

總和は、ヘーゲルが第十八世紀に於ける英佛の例に倣うて「市民的社會」なる名稱の下に包括せし所のもの——に之が根據を有するものなる事、而かも此市民的社會の解剖的研究は之を經濟學に求むべきものなる事、の結論に達した。後者(經濟學を指す)の研究は、余は之を巴里に於て始めたるが、ギゾー氏の追放命令の結果として余はブルユッセルに移りたるが故に、更に之を其地に於て繼續した。かくて余の得たる所の、而して一旦之を得し後は、余が研究の指南車となりし所の、其一般的結論は、簡單に之を次の形式に表はし得る。』

唯物史觀に關するマルクスの有名なる公式は、以上の如き前置の後に、次の如く書表されてある。なほ文章は、以下掲ぐる所のものが、少しも切れずに、全部が直ぐ、前に掲げたる所に續いて居るのである。

『人類は、彼等の生活の社會的生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意志

より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入り込むものである。此等生産關係の總和は社會の經濟的構造——法制上及び政治上の上層建築が依つて以て立つ所の、又一定の社會的意識形態が之に適應する所の、眞實の基礎——を成すものである。物質的生活の生産方法は一般に社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づける。人類の意識が其存在を決定するに非ずして、寧ろ之に反し彼等の社會的存在が意識を決定するものである。社會の物質的生産力は、其發展の一定の階段に於て、それが從來其のもの内に活動し居たる所の當時の生産關係、又は只その法制上の表現に過ぎざる所の所有關係、と衝突することと爲る。かくて此關係は、生産力の發展形式より、變じて之が束縛となるに至る。是に於てか社會革命の時代來る。經濟的基礎の變動に伴うて、巨大なる上層建築の全部が、或は徐々に、或は急激に變革し了

(4) bürgerliche Gesellschaft.

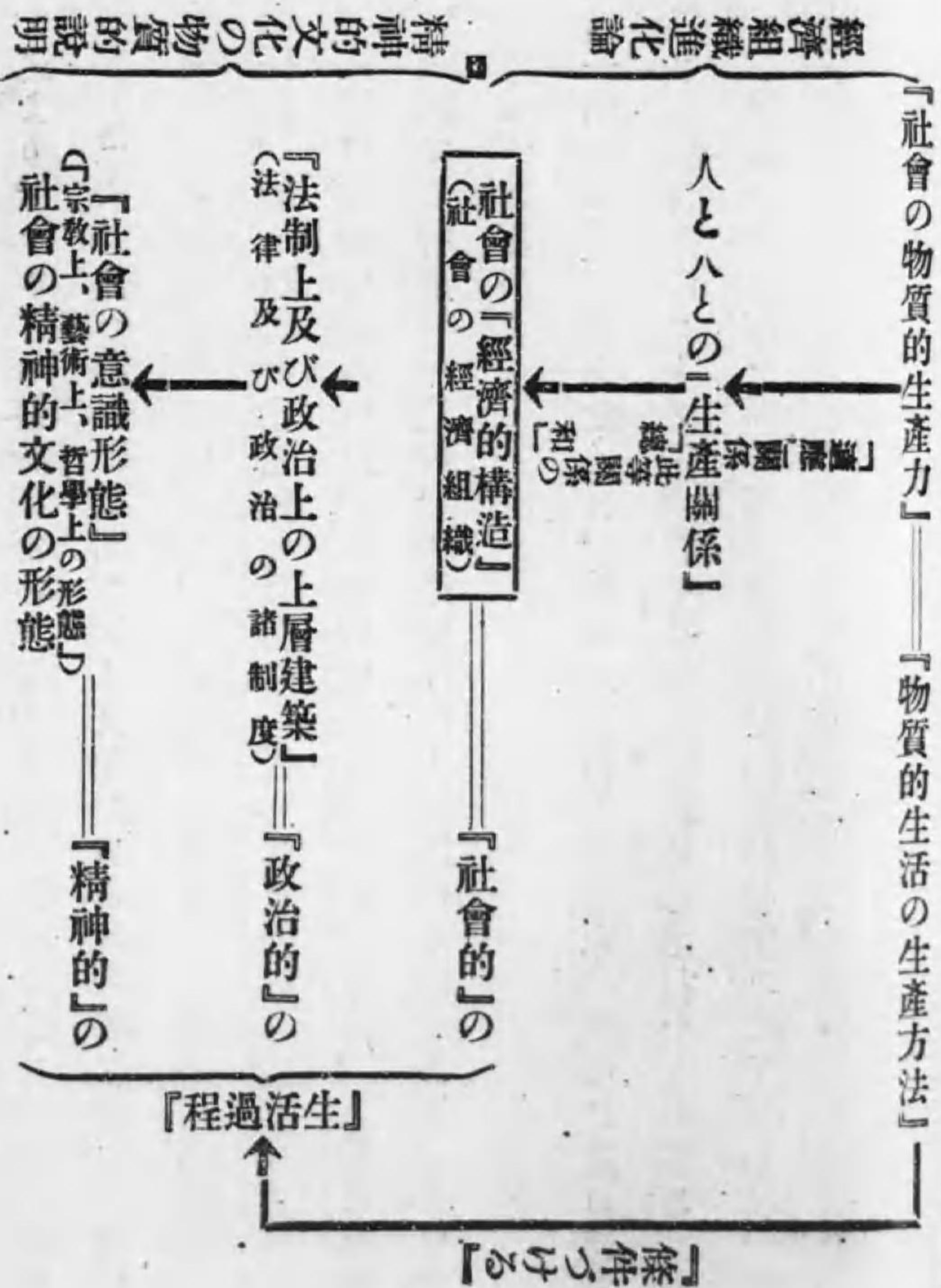
る。斯かる變革の觀察に當つては、吾人は常に、自然科学的に論證することを得べき經濟的の生産條件の上に起れる物質的の變革と、人類が此衝突を意識し且之が決戦を爲すに至る所の、法制上、政治上、宗教上、藝術上、又は哲學上の形態、簡單に言へば觀念上の形態とを、區別しなければならぬ。斯かる變革時代をば其時代の意識より判斷せんとするは、恰も或個人が自分自身の事を如何に考へつゝあるやに依つて其人を判斷せんとするに等しく、得る所管に是れなきのみならず、寧ろ此意識なるものが、物質的生活の矛盾より、即ち社會的生産力と生産關係との間に存在せる衝突よりして、始めて説明さるべき者なのである。一の社會組織は、總ての生産力が其組織内に於て餘地ある限り其發展を爲し遂げたる後に非ざれば、決して顛覆し去るもので無く、又新たなる、より高度の生産關係は、其のものの物質的の存在條件が古き社會の母胎内に孕まれたる以前に於て、決して發生し來

るものではない。されば人間は、常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである。何故といふに、凡て問題なるものは、一層正確に之を觀察するならば、其解決に必要な物質的條件が已に存在し居るか、又は少くとも其成立の過程に在る場合にのみ、初めて發生するものなるが爲である。極めて其大體を論ずれば、吾人は亞細亞的、古代的、封建的、及び現代の資本家的の生産方法を以て、社會の經濟的組織の進歩の階段と爲すことを得る。而して此の中資本家的の生産關係は、社會的生産方法の敵對的形態を採れるものの最後である。——茲に敵對的と謂ふは、個人的敵對の意に非ずして、各個人の生活の社會的條件より生ずる敵對の意である。——併し資本家的社會の母胎内に於て發展したる生産力は、同時に此敵對の解決に必要な物質的條件を作る。されば、人類の歴史の前史は、此社會組織を以て終りとする譯である。(6)

(6) 以上に相當する獨逸の原文は拙著「社會問題研究」第三冊 24—25 頁に收む。

マルクスの唯物史観の公式といふのは、以上の如きものである。之に依つて見れば、マルクス自身が此史観を以て、余が研究の指南車となりし所のものと言つて居る。私は先きに、此唯物史観を抜きにしてマルクスの經濟論を理解せんとするは、棒を以て月を落さんとするが如きものである、と云ふ意味のことを言つたが、それは其筈であるといふことが、此一句を見ても略ぼ想像が出来やうかと思ふ。

只今述べた唯物史観の公式に含まれて居る思想をば、説明の便宜の爲め先づ之を圖表にして見る。(表中)『内に入れたる文字は、マルクスの用語。』



扱て之より、マルクス自身が書いた唯物史觀の公式に就て、少し説明を加へて行かうと思ふ。先づ第一には斯う云ふ文句がある。『人類は其レーベン（生活又は生命）の社會的生産に依りて、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入込むものである』。是が議論の始まりである。茲に、人類は其物質的生産力に適應する所の、一定の、生産關係に入り込むものである、と言ふのは、如何なる意味であるか。

試に一例を擧げて説明せんに、例へば、私が此東京の眞中に生れ落ちたとする。さうして自分のライフ（生活）を社會的に維持して行かうとする。山林に隱遁して、果實を拾ひ畑を耕して、自給自足の生活をするのでなしに、社會の人と何等かの關係を保つて、其物質的生活を維持して行かうと考へたとする。而かも父母から譲受けた財産は少しも無いとする。さうしたならば、私は自分

の勞働力を何人かに賣つて、一定の月給なり賃銀なりを得て行くより外に、生活の道はない。如何に私が資本主義の經濟組織に反感を有つて居たとしても、何等かの經濟的事業に参加しやうと思ふならば、銀行なり會社なりに就職して、資本家の手足となつて働くより外に道はない。即ち資本家に對して賃備勞働者たる關係を結ぶのである。さうして其資本家對賃備勞働者の關係といふのが、即ちマルクスの所謂生産關係なるものであるが、其關係は、私の生れぬ前から、社會の生産力の如何に應じて既に一定して居る所のもの、私の意志から獨立して決定されて居る所のものである。一個の無産者としての私が、何等か社會的なる經濟的事業に参加しやうとすれば、今日の世の中では、私の意志より獨立して既に決定され居る所の、資本家對賃備勞働者といふ一定の關係、其に入り込むの外は無いのであつて、さう云ふ關係を結ぶまいと思つても、どうしても其を結んで行かなければ、私は生きて行かれないのである。勿論其關係は、生産

力の發展の程度によつて同じくない。例へば之を工業に就て言へば、中世の同業組合時代には、生産者相互の關係が親方、職人、徒弟といふ關係になつて居る。然るに機械が發明され生産力が發達して來ると、大きな紡績會社が起り、織物會社が起ると云ふやうになる。さうして、さう云ふ世の中になつて來ると、其に應じて生産關係が又變つて來る。それ／＼の紡績會社、織物會社には、一方に資本主が居り、他方に多勢の労働者が居て、其資本主と労働者の間に一定の賃傭關係が結ばれる。それは親方對職人又は徒弟の關係とは、全く性質の違つた別種の生産關係である。然るに一旦さう云ふ生産關係が出來ると云ふと、それと共に自ら之に應じた所の分配關係が出來るものである。即ち資本主は利潤の形に於て大部分の生産物を取る、労働者は又賃銀の形に於て僅ばかりの生産物を分けて貰ふ、さう云ふ一定の分配關係が必然的に一定の生産關係に伴ふ。二者は同一物の表裏である。さうして此等生産關係及び分配關係の全體を合せ

たものが社會の經濟組織と謂ふものである。さうして其經濟組織が形の上に現はれて來たものが、其國の政治上及び法律上の「上層建築」である。前者は社會關係の實質であり、後者は其實質を形の上に現はしたものである。而してマルクスの意見に依れば、此經濟組織——「社會の經濟的構造」——と云ふものが、社會の「眞實の基礎」である。例へば此建物(講堂を指す)を一の社會だとすれば、經濟組織と云ふものは恰も此建物の土臺に相當して居る。さうして其土臺の上に、斯ういふ色々な物(堂内の左右上下を指す)——壁だの窓だの天井だの家根などが出來て居る。マルクスの言葉で言へば、此土臺の上に、先づ「政治上及び法律上の上層建築」が出來、更に又、「宗教上、藝術上、哲學上」、其他様々の「精神的生活」に屬する文化と云ふものが、色々な花を咲かして來る。此の如くにして「物質的生活の生産方法は、社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づけて居る」のである。土臺があるから、其が原因になつて、壁や家根が出

来たとは言へぬが、土臺があるので、其が條件になつて、壁や家根が維持されて居るのである。斯う言ふ關係になつて居るとマルクスは見たのである。それであるから、**一たび社會の生産力が變動して來ると、**——例へば明治の維新前と維新後と云ふやうに社會の生産力が變動して來ると云ふと、——それに伴うて必然的に生産關係が變つて來る。さうして其裏は分配關係であるから、之も勿論變つて來る。既に生産分配の關係が變つて來るならば、之を綜合したものが經濟組織に外ならぬのであるから、畢竟するに、生産力が變動して來れば、經濟組織が亦變動せざるを得ぬのである。而して既に經濟組織にして變動せんか、此實質を形式に現したる法律及び政治も亦當然變動して來る。斯の如くして廣い意味に於ける社會關係と云ふものが全部變動して來る。然るに此等の社會關係が變動して來ると云ふと、其社會に流行して居る所の、宗教でも、道德でも、藝術でも、哲學でも、總ての精神的文化の表現形式——マルクスの所謂「社會

的の意識形態」又は「觀念上の形態」——が變つて來る。特別なる個人の思想は別として、其社會に廣く流行する思想——私は假に之を社會思想と名ける——が變つて來る。今マルクスは、先きの社會關係と此の社會思想とが變動して行くことを、「歴史の進行」と言つて居るのである。唯物史觀に關しては、此歴史と云ふ言葉に就て能く誤解があるが、其點は十分に注意しなければならぬ。例へば乃木大將が明治の末期に切腹して死なれたと云ふことは、歴史上の一事件である。マルクスはさう云ふ歴史上の一々の事件をば盡く生産力の變動で説明しやうと云ふのではない。マルクスが歴史と言ふのは、社會關係及び社會思想の變動のことである。例へば日本に於て封建制度が崩壊して、明治維新以後政治上に於ては立憲君主制度が實現せられ、經濟上に於ては資本主義の組織が實現せられた。さうして此の如くに社會關係が變動したと同時に、維新前と維新後とを比ぶれば、總ての方面に於て社會思想がすつかり變つて來て居る。其は

今一々申す迄もなく、五六十年前のことを回想すれば、何人にとつても著しく感ぜざるを得ぬことである。此の如く社會關係が變動し社會思想の變遷することを、マルクスは名けて歴史と謂ふのであるから、此等の問題に關係のない如何なる事變が起つたとて、マルクスに言はすれば、それは彼の謂ふ所の歴史ではない。マルクスの謂ふ歴史とは斯の如きものである。さうして斯の如き意味の歴史なるものが進み動いて行くにつき、其根本的條件となれるものは、社會の生産力の變動であると云ふこと、それがマルクスの史觀の主張であつて、さう云ふ意味に於てのみ、——それより以上の意味に於てもなく、又それより以下の意味に於てもなく——彼の歴史觀と云ふものが一元論になる譯である。

以上が大體の構造である。そこで斯う云ふことになる。即ちマルクスの考に依れば、一定の社會組織のライフ・ヒストリー（一生涯の歴史）には、大凡そ二

個の時期が在るものである。第一期は、其社會組織が社會の生産力と正に調和し、之が發展の爲め最も都合好き關係に在る時代である。然るに社會の生産力が或程度以上に發展すると、社會組織と社會の生産力との調和が破れ、從來生産力の發展を助長し居たる社會組織が、變じて却て社會の生産力の發展を妨害する事に爲る。其が即ち第二期である。されば第二期に於ては、社會の生産力は社會組織の爲に一定の束縛を受けながら、尙其發展を續けるのである。乍併社會の生産力が發展すればするほど、社會の生産力と社會組織との間に於ける矛盾衝突は益々甚くなり、其極遂に社會的革命即ち社會組織の改造は免るべからざる必然の勢と爲る。而して既に社會的革命にして行はれんか、舊社會組織は之に依りて終を告げ、新たなる社會組織の第一期が始まり、此の如くにして社會組織は絶えず進化を續けるものである。

かく言へば、舊き社會組織と新たなる社會組織とは、木に竹を繼げるが如く

(1) マルクス自身が此の如く二期に分ち居るに非ず。茲には只彼の眞意を理解するに便ならしめんが爲め、假に此二期を分つ。

に連続せるかに思はるゝ處あれども、實際に於ては「一の社會組織は、總ての生産力が其組織内に於て發展の餘地ある限り其發展を爲し遂げたる後に非ざれば、決して顛覆し去るもので無く、又新たななる、より高度の生産關係（即ち社會組織）は、其のものの物質的存在條件が古き社會の母胎内に孕まれたる以前に於ては、決して發生し來るものでは無い」。一定の社會組織の下に於て社會の生産力が次第に發展するのは、譬へば卵の殻の中で雛が段々に成育するが如きものである。或程度以上に雛が育つと外殻が邪魔に爲つて來るには相違ないが、併し「發展の餘地ある限り其發展を爲し遂げたる後に非ざれば」、殻は決して内より破らるべきもので無く、又勿論外より人為的に之を破るべきものでも無い。さうして一旦殻が破れると、其と同時に雛は産れ、且産れぬ前の卵の状態と、産れた後の雛の状態とは、一見甚しき變化があるけれども、而かも「新たななる、より高度の」生物たる雛の存在に必要な條件は、「古き社會の母胎内」たる卵の

殻内に於て、既に以前から次第に成熟しつゝ、あつたものである。又譬へば、人間の子は、母の胎内に約十箇月間宿つて居るものである。其十箇月の間に於て、母胎内に成育の餘地ある限り成育し、母の體外に出でて獨立の存在を爲し得るだけの條件を具へ了へて後、始めて出産する。出産には必ず「産みの苦み」を伴ひ、常に多少の犠牲を伴ふ。併し之に依りて新たなものが生ずる。其が所謂社會的の革命である。

社會組織の變革は此の如くにして行はる。故にマルクスの意見に依れば、社會組織の問題に就ては、「人間は常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものである」。卵の殻の内では雛が相當に成育してからで無ければ、其殻は邪魔にならぬ。従て殻を破ると云ふ事は問題にならぬ。雛が或程度まで成育した後、始めて殻が邪魔になり、之を如何にして破るべきかが問題になる。併し已に其が問題になる頃には、雛は殻を破つて外に出ても、獨立の存在を保ち得る状態に



近づきつゝあるのである。即ち「凡て問題なるものは、其解決に必要な物質的條件が已に存在して居るか、又は少くとも其成立の過程に在る場合にのみ、初めて發生する」のであるから、其意味に於て、人間は自ら解決し得る問題のみ問題とするものである。

序ながら一言注意して置く必要のあることは、マルクスの所謂社會的革命的意義である。それは、既に述べたる所に依りても明かなる如く、只社會組織の變革と云ふ意味である。従て暴力を用ふると云ふことと革命が實現されると云ふことは何等必然的の連絡はない。如何なる小改革であつても、相手の出方に依ては、其實現の爲に、暴力を伴ふことがある。如何なる大革命であつても、相手の出方に依ては、これが極めて平和に行はれる場合がある。又マルクスの所謂社會的革命的なるものは、必ずしも急激に行はるゝ變革の意味ではない。故に唯物史觀の公式を御覽になると『是に於てか社會革命の時代來る。經濟的基

ニが革命的な改革  
あり、回りの改革  
こそ、現代の階級  
破滅の回りの特  
徴は、此の回りの  
方向に在るわけだ

マルクスは革命  
と云ふやが必  
由、階級と階級の  
この  
階級を  
つなぐものは  
いふ事

礎の變動に伴うて、巨大なる上層建築の全部が、或は急激に、或は徐々に、變革し了る』と書いてある。必ずしも急激に行はれると限らない、或は徐々に實現されることもあるが、兎に角、舊社會組織が崩壊して新たな社會組織が起ると云ふことを、マルクスは社會的革命と謂つて居るのである。もし革命と云ふ文字が嫌ならば、社會的革命といふ代りに社會的維新と云うても宜い。以上が唯物史觀の中で、假りに私が社會進化論と言つて置いた部分に相當するのであるが、次には階級争闘説に就て大體の説明をしなければならぬ。

第三、階級争闘説

マルクス唯物史觀の何物たるやは、以上を以て略ぼ大體の説明を終へたのであるが、之に關聯して猶説明するの必要あるは、マルクスには別に階級争闘説なるものあれど、この階級争闘説と、かの唯物史觀との關係如何と、いふ事で

ある。

例へば「共産主義宣言」を見ると、「總て從來の歴史は階級争闘 (Klassenkampf.) の歴史である」とか、「從來の社會の歴史は、盡く階級對立 (Klassen Gegensatz.) — 一それは種々の時代に種々の形を呈せる所の——に於て進行せしものである」とか述べてある。即ちマルクスは、一方に於ては、社會の生産力の發展を以て歴史を動かす根本條件と爲しながら、他方に於ては、總て從來の歴史は階級争闘の歴史に外ならずと爲して居るのであるから、此點に於て、彼の説は前後矛盾する所あるが如く見ゆる。是に於てか、この一見すれば如何にも矛盾する所のものが如き二個の主張は、如何にして調和され得るかと云ふことが、先づ問題と爲る譯である。

乍併之をマルクスの見地より言ふならば、此二者は蓋し離るべからざる連絡を有するものであらう。何故といふに、彼の考に依れば、(太古に於ける土地共有制の崩壞以來)、凡て過去の歴史に於て、社會の經濟的構造は階級對立の上に打建てられたるものである。——のマルクスが茲に階級と謂ふは、經濟上の利害の相反せる經濟的階級の意味にして、更に具體的に言はば、土地ならば土地、資本ならば資本と云ふが如き、所謂生産手段を所有する者と、之を所有せざる者との區別、從て經濟上他人を壓服し掠奪し居る者と、他人に壓服され掠奪され居る者との區別を指す。——固より斯かる階級の對立は、時代に依つて其形式を異にして居る。『極めて其大體を論ずれば、吾人は亞細亞的、古代的、封建的、及び現代の資本家的の生産方法を以て、社會の經濟的組織の進歩の階段と爲すことを得る。而して此の中、資本家的の生産關係は、社會的生産方法の敵對的形態を採れるものの最後である。』<sup>(1)</sup>此の如く階級對立の形態は時代に依つて自ら同じからずと雖も、而かも社會の經濟的構造が、從來兎も角も何等かの形態に於ける階級の對立を主義とせる以上、而してこの社會の經濟的構造なるものは、唯

物史觀に説くが如く、「法制上及び政治上の上層建築が依つて立つ所の、又一定の社會的の意識形態が之に適應する所の、(社會の)眞實の基礎を成すもの」たる以上、畢竟するに、凡て過去の歴史は階級對立の歴史である、と言ひ得らるる筈である。

然らば、マルクスは何故に、凡て過去の歴史を以て、常に階級對立の歴史と爲せしのみならず、更に一步を進め、之を以て階級争闘の歴史に外ならざるものと爲したか。蓋し既に繰り返し述ぶる如く、マルクスの經濟的史觀(唯物史觀)は、社會組織は生産力の變動に伴うて變動すといふことを、其根本の主張と爲すものであるが、今翻つて考ふるに、凡て社會組織なるものは、其社會に於ける多數の人々が相依り相集つて之を作り出し、又之を維持しつゝあるに外ならざるが故、假ひ社會組織は生産力の變動に伴うて變動すと言ひたりとて、其社會組織改造の爲には、其社會内に於ける多數の人々の手を借りなければなら

(1) (2) 前出「經濟學批判」序文

ぬ譯である。それ故、一定の社會組織が變革せらるゝ場合には、必ず其事業を擔當する一群の主動者が居て一定の働きを爲すのであるが、其運動の基礎と爲る勢力は、歴史上何時も現在の社會組織の下に於て不利益なる地位に在る階級である。現存せる組織の下に於て不利益なる條件の下に在る階級の人々が、其組織の改造に賛成するのは、自然の人情である。乍併、之と同時に、現存せる組織の下に於て特に好都合なる條件の下に在る階級の人々は、——若干少數の有志者を除き、階級全體としては、——これ亦人情の自然として、之が改造に反對すべきである。是に於てか社會組織の改造は、常に階級争闘の形式に依つて行はるゝの外は無い。此意味に於て「對立なくんば進歩なし、これ今日までの文明を支配せし法則である。今日までの所、生産力は斯かる階級對立の支配を基礎として發展し來りしものである」。(3)マルクスは此の如く考へた。これ彼の史觀と密接離るべからざる關係に於て、——其史觀をば一筋の金の絲の如くに

(3) Elend der Philosophie, S. 39

縫ひつゝ、——階級争闘説なるもの所在の所以である。

唯物史観と階級争闘説とは、以上述ぶるが如き關係よりして、密接に連絡せられて居る。乍併、この二つの者は、全然分離すべからざる關係に在る譯では無い。

蓋しかの唯物史観なるものは、人類の組織せる社會の形態が、外圍の物質といふ無意識的の力の爲に、如何なる影響を受くるものなるかと云ふ事を、自然科学的に觀察して立言せしもの故、若し其説にして正しとせんか、そは人類が一定の物質的境遇に依り圍繞せられて生活する限り、且人類が完全なる意識的人格者とならざる限り、——而かも人類が完全なる意識的人格者とならば、そは神類となれるものにして既に人類では無い、過去現在將來を通じて常に適用せらるべき歴史観である。然るに後の階級争闘説は、此の如き外圍の影響を受けつゝある所の人類社會の中に、經濟的階級の區別を生じ、生産手段を所有する

者とせざる者と、掠奪するものとせざる者との區別を生ずる時は、是が爲め人相互の間に於ける社會關係は果して如何なる状態を呈するに至るべきか、新たなる生産力の發展の爲め生産力と社會組織の調和破るゝに至る時は、其「物質的生活の矛盾」といへる外界の無意識的の力は、人々の意識の上に果して如何なる感情、欲求、主義、主張となつて現はれ來るか、又新たなる生産力の發展の爲め必然的に惹起せらるべき舊社會組織の崩壊は、如何なる方法又は形態に於て實現せらるべきか、と云ふ問題に就ての觀察である。階級争闘説は乃ち之に答へて、社會一部の者に依る生産手段の獨占は、階級對立の社會組織を生み、階級的の感情と思想を生み、繼て又階級争闘を生むに至る、と言ふのである。要するに、階級争闘説なるものは、生産手段の私有の行はれつゝある階級的社會に就て、先きの唯物史観の應用を試みたる一學説と見るべきものなのである。従てそは唯物史観の如く、過去現在將來を通じて凡て適用せらるべき性質のも

のには非ずして、専ら階級的社會にのみ適用せられ得るものである。されば現にマルクス自身も明白に『總て從來の歴史は階級争闘の歴史』なりと言ひ、之を以て盡く人類の歴史を律せんとするに非ざることを明瞭にしてゐる。即ち彼の意見に依れば、總て從來の歴史は階級争闘の歴史なりしも、社會組織進化の結果として、今日の社會に於て掠奪され壓制され居る階級——即ち無産者階級——は、己れ自身を解放する爲に、社會全體をば一時に總ての掠奪、壓制、階級別及び階級争闘より解放せざるべからざるに至りしものにて、從て今日の社會に於ける有産者對無産者の階級的對立は『社會的生產方法の敵對的形態を採れるものの最後』<sup>(1)</sup>たり、又其争闘は人類の歴史に於ける最後の階級争闘たるものにて、其結果、將來の社會に於ては、他人を掠奪する爲の手段と爲るべき總ての生産手段は社會の公有に歸し、經濟上に於ては（マルクスの言ふが如き意味に於ける）階級の區別をば全く認めざる所の社會主義の經濟組織が實現せら

(1) 前出「經濟學批判」序文

れ、かくて階級争闘の悪夢は總て過去の歴史として葬られ、『人類の歴史の前史』は今日の社會組織を以つて終りとし、『人類の眞の歴史は、社會主義的組織の樹立と共に、其第一頁を肇むるに至るべし、と言ふのである。之に由つて考ふれば、階級争闘説は唯物史觀の一要素と謂ふよりも、全く過去の歴史に對する其一適用と看做すべきものなること、略ぼ明かであらう。

思ふにマルクスは、社會組織改造の志を抱いて、是が爲に過去の歴史を顧みたるものである。それ故彼の史觀は、社會組織の進化を以て問題の中心として居る。從て彼の見地よりすれば、社會組織の變化なくんば則ち歴史なきものである。

更に又彼が、社會組織の改造に就て其根本眼目と爲したる所は、今日の資本家的社會に於ける經濟的階級の區別を廢止することに在つた。詳しく言はば、今日の社會は、大體に於て、一方には全く遊んで居ながら富裕なる生活を送り

(2) 「經濟學批判」序文

得る者と、他方には年中休みなしに働きながら貧窮なる生活を爲し得るに過ぎざる者と、此二階級に分れて居るのであるが、マルクスは斯かる階級の區別を全廢せんことを其思想の眼目と爲したるものである。それ故歴史を觀察するに當つても、自然に階級の對立といふことが其着眼の中心點と爲つた譯であらう。要するに、彼に特有の唯物史觀あり、又之に伴うて彼に獨特の階級争闘說あるは、蓋し社會主義者としてのマルクスの科學的產物として寔に相應はしきものである。

唯物史觀と階級争闘說との關係は、大體以上の如きものと考へるが、以下少しく階級争闘說そのものに就て説明せんに、(マルクス自身が明かに次の如き言葉を以て説明して居る譯では無いが)、彼の意見に依れば、社會階級の發展には二の時期があるのである。即ち他の階級に對しては已に一の階級を成せりと言ひ得らるゝも、其れ自身に於て未だ一の階級を成せりと言ひ難き状態に在る場

合が、第一期であつて、其が第二期に進まば、其れ自身に於て一の階級を成すに至ると言ふのである。茲に其れ自身に於て一の階級を成すといふ意味は、其階級に屬しつゝある者が階級的自覺を有するに至ることであつて、又階級的自覺と謂ふは、一の階級に屬する者が、己等は他の階級の者に對して到底利害相容れざる地位に在りて、階級争闘を爲すことは己等の避くべからざる運命なることを自ら意識するに至るとである。而してマルクスの意見に依れば、階級争闘は、第一期に於ては經濟的争闘たるに止まる、即ち單に經濟上の利益の奪ひ合ひに止まるけれども、第二期に於ては、それが進んで更に政治的争闘と爲り、政治上の權力の奪ひ合ひに爲ると言ふのである。私は先きにマルクスの經濟的史觀を説明せし折、社會の生産力と社會組織との關係をば、説明の便宜の爲に二期に分ち、第一期を二者調和の時代となし、第二期を二者衝突の時代と爲したが、其が恰も茲に謂ふ階級發達の第一期と第二期とに照應する譯なのである。

マルクスの謂ふ所の階級とは以上の如き意味であるが、然らば社會に此の如き階級の對立を見るに至るは如何なる原因に本くかと云ふに、マルクスの意見に依れば、一の社會團體が生産手段を獨占することに依り他の社會團體の剩餘労働を奪ふと云ふこと、之が其根本原因である。茲に剩餘労働 (Mehrarbeit, sur-plus labour.) と謂ふは、これ亦マルクス特有の術語の一であるが、マルクスの考に依れば、人間の労働は之を分つて二の部分とすることが出来る。其一は、自己の生活の爲に必要とする部分の労働であつて、其が必要労働である。他の部分は、此必要労働以上の餘分の労働で、其が即ち剩餘労働なるものである。最も幼稚なる原始社會に在つては、經濟上の技術がまだ發達しないが爲に、人間の労働に餘裕が無い、一部分の人が働いて居れば、他の者は遊んで居ても養つて貰へるといふ譯には行かぬ、即ち社會に剩餘労働なるものが無かつたからして、階級の別も亦これなかりしものであるが、其後經濟上の發達に伴ひ、次第に人

間の労働に餘裕が出来て、一人の働きに依つて、數人又は數十人分の生活必需品を作り出し得ることに爲る。即ち人間の労働が必要労働と剩餘労働との二の部分から成り立ち、且剩餘労働に屬する部分が次第に増加して來る。是に於てか、或者の剩餘労働は他の者の爲に奪はるゝことと爲り、かくて之を奪ふ者と奪はるゝ者との間に利害の衝突を生じ、遂に社會は階級的社會となるに至つたものである。

然らば何故、斯かる階級の存在より生ずる利害の衝突が、單に經濟的争闘たるに止まらずして、第一期より第二期に入るに及びて、遂に其が政治的争闘の形を採つて現はるゝことに爲るかといふに、マルクスの意見に依れば、社會組織の改造は常に權力階級にとりて不利益なる事柄なれば、道德的宗教的説教に依りて此等權力階級の感情及び思想を動かし、彼等をして自發的に社會組織の改造を行はしめんとするも、それは木に縁りて魚を求め、杖を以て月を落さんとする

の類である。それ故、壓服され居る階級の者、其當時の社會組織の爲め不利益を蒙りつゝある階級の者が、自ら起つて政治運動を起し、幾分なりとも國家の權力を自家の手に收め、國權の發動に本く外部的強制に依りて、或は急激に或は徐々に、經濟組織の改造を實行するの外は無い。従て階級的自覺にして發生し來るならば、階級間に於ける經濟上の利害の衝突は、更に進んで政治上の争闘を喚起せざるを得ざるに至る、と言ふのである。

マルクスの謂ふ階級及び争闘の意味は、以上の如くである。要するにマルクスの意見に依れば、社會そのものの歴史的進行は、凡て社會組織の變動を中心とするものにて、且其社會組織の變動は、從來の歴史に於ては、凡て階級争闘の形式を以て實現せられしもの故、畢竟過去の歴史は凡て此階級争闘の見地より觀察し研究し得べく、従て或革命の前に横はる長き期間の歴史は、之を以て革命の醸成されつゝある時代、即ち階級が次第に發展して其自覺を生ずるに至る準備の時代と見るべく、又斯く觀察することに依り、始めて社會の歴史的進行を科學的に觀察するを得る、と云ふのである。これ彼が「總て從來の歴史」を以て「階級争闘の歴史」に外ならずと主張せる所以である。

#### 第四 括

以上の説明に依りて、マルクスの唯物史觀に關する主なる疑問は略ぼ解決したのであるが、以下其史觀竝に階級争闘説に本く彼の社會觀に就き、其要領を簡単に纏め、傍ら以上の説明に落ちたる所を幾分か補ひつゝ、マルクスの原文を離れ、其精神と思はるゝ所を、余が言葉にて言表さば、略ぼ次の如くである。經濟上に於ける生産力の發展は、凡て社會組織變動の根本條件たるものである。蓋し如何なる時代、如何なる社會に於ても、社會の生産力の發展の程度如何に應じて、其社會を組織しつゝある人々の生産關係が定まり、之に伴うて其



生産物の分配關係も定まるものである。而して此等の生産關係及び分配關係なるものは、相集つて社會の經濟的構造を形造る所以のものであるが、この社會の經濟的構造こそ社會の根本基礎であつて、之に應じて其社會に於ける政治上及び法律上の組織並に制度も決定せらるゝ譯である。即ち一定の社會に於ける政治及び法律なるものは、其社會に於ける經濟上の實質の形式的表現に過ぎざるものである。然るに此等の社會組織又は社會制度なるものは、更に其社會組織の下に生活しつゝ、ある人々の心の状態を支配し、以て其社會に特有なる哲學、文學、藝術、宗教、道德等を醸成するに至るものである。故に社會に於ける富の生産力が或程度以上に發展するならば、それにつれて、社會内に於ける人と人との生産上及び分配上の關係が變動し、従て社會の經濟組織が變革され、又それにつれて、社會の精神的文化の表現形式も亦其外相を一變して來るものである。

故に之を一定の社會組織に就て觀察するならば、凡そ之を二期に分ち得るものである。第一期は、生産力と生産關係が正に調和せる時期であり、第二期は生産力が已に或程度以上に發展せし爲め、從來の生産關係と新たに發展せし生産力との間に於ける調和が、次第に破壊されて來る時期である。即ち第一期に於ては、生産力發展の形式たりし社會關係が、第二期に於ては、却て生産力發展の束縛となるに至る。今斯かる時代に於て、若し其社會に於ける人々が、此社會組織と生産力との衝突を解決することが出来なかつたならば、其社會の進歩は停止され、或は其社會は退化して遂に滅亡して仕舞ふ。之に反し、若し此衝突を解決せんとするならば、社會組織を改造するの外は無いのであるが、幸にして此の如き改造が行はれたならば、其は社會組織進化の正常なる過程を経過したものと謂ふべきであつて、之と同時に、又新たな社會組織の第一期が始まることに爲るのである。所謂社會的革命なるものが、即ち其れである。

此の如く、之を社會の正常なる進化の經過に就て觀察すれば、社會の生産力の發展が社會組織の爲に束縛せらるゝに至れば、必然的に社會組織の改造が行はるゝものである。乍併、茲に社會組織の改造が必然的に行はるといふ意味は、只機械的、自動的に行はると云ふ意味ではない。元來社會なるものは、意識を有せる人間の相集つて組織せるものなれば、社會組織の改造は、其社會内に生活せる人々の意識的活動により、始めて實現せらるゝものである。然らば、生産力と生産關係との間に於ける物質的衝突は、其生産關係の下に生活せる人々の意識の上に、果して如何なる影響を及ぼすやと云ふに、それは同じ社會に生活せる人々の間に、意識的衝突を惹き起すに至らしむるものであつて、其意識的争闘の結果として、始めて社會組織の改造が實現せらるゝことに爲るのである。而して其意識的衝突が如何にして起り、如何にして社會組織の改造が行はるゝに至るかを、過去の歴史に就て説明せんとする時は、吾等はそこに所謂階級争闘

説なるものを持ち出さなければならぬ。

蓋し古代に於ける共產制崩壊以後の、凡ての過去の歴史に於ける如く、社會に階級の別を存する場合には、上に述ぶるが如き社會的革命は、主として壓服され居る階級の力に依り、階級争闘の方法を以て、實現せらるゝに至るものである。凡そ壓服され居る階級の發達には二期を分ち得るものにて、其第一期は未だ階級的自覺を有せず、従て他の階級に對し單に經濟的争闘（經濟上に於ける利益の争ひ）を爲すに止まる場合なるが、これは同時に、一定の社會組織の第一期に相應するものである。然るに一定の社會組織が第二期に進むと、其同時に、壓服され居る階級も亦第二期に進み、かくて階級的自覺を起し、自己の利益が他の階級の利益と到底相容れざるものなることを悟り、其自覺に本き、特權階級に向つて、嘗に經濟的争闘を爲すのみならず、公然政治的争闘（政權の争ひ）を爲すに至るものである。而して其争闘の結果は、或は相争ふ二個の

階級の共倒れ (Gemeinsamer Untergang) となり、或は壓服され居る階級の勝利に歸する。而して後の場合に於てのみ、始めて舊社會組織破れて、より高度なる新たなる社會組織起り、言ひ換ふれば、社會的革命が成就することと爲り、社會組織は始めて正常なる進化の一階段を上ることになる。蓋し件の階級争闘に於ける争ひの眼目は、社會全體の生産力の發展の爲に社會組織を改造すべきや否やの點に懸つて居るのである。而して從來の社會組織の下に於て特別の利益を享受しつゝある階級は、假ひ其組織が社會全體の生産力の發展を束縛するに至るとも、彼等は之を束縛することに依りて己等自身が特別の利益を享受し得つゝあるが故に、此等の階級が階級そのものとして、社會組織の改造に反對するは、自然の勢である。乍併、若し此等階級の主張にして飽くまで維持せられんか、其結果、社會全體の生産力の發展は、社會一部の階級の利益の爲に、何時までも束縛せられ行くこととなるが故に、其社會の進歩は停止せられ、墮て退化し

衰亡しなければならなくなる。

故に之を社會組織の正常なる進化の經過に就て觀察するならば、社會に階級の別を存する限り、社會の生産力の發展が社會組織に依り束縛せらるゝに至る時は——即ち社會全體の發達の爲め社會組織の改造が必要とせらるゝに至る時は、必然的に、階級争闘の方法を以て、主として壓制され居る階級の力に依り、其の必要とせらるゝ所の社會組織の改造が、實現せらるゝことと爲る、と言ひ得るのである。

社會組織は以上の如くにして變革さるゝものであるが、扨て一旦社會組織が變革されて仕舞ふと、其につれて又、其社會の内に生活せる人々の心の状態も變化して來て、社會の精神的文化の表現形式が、舊社會のそれとは、大に面目を異にすることに爲る。

此の如く社會組織と社會思想とは密接なる關係を有するものである。然るに

總て過去の歴史に於けるが如く、社會が經濟上の利害の相反せる若干の階級に分割され居る場合に於ては、其社會に流行せる思想は、常に其社會の經濟的條件の結果と云ふのみに止まらずして、更に一步を進めて觀察すれば、實は其等の經濟的條件の爲に優等の地位を占め居る或社會階級の必要、欲望、野心等に適應するやう作られ居るものである。蓋し從來の階級的社會、換言すれば、社會的に必要なる生産手段の私有制度を認め居る社會に於ては、常に社會の生産手段を所有し又は支配する所の一の階級あるものにて、且其階級は已に社會の生産手段を支配するの力を有せるが爲に、之に依りて社會の生産及び分配の状態を左右し、其結果として又、彼等の利益に適應するやうに、廣く社會の人心を支配し、凡ての人の思想及び感情を束縛し制御し統一するに至るが爲めである。而して社會思想が斯かる状態を呈する時代が、恰も一定の社會組織の第一期に相當し、又階級成立の第一期に相當する譯である。

然るに社會經濟の進歩に伴うて、何時しか別種の生産手段が新たに社會的要素を占めて來るのであるが、已に一たび斯かる事情が発生して來ると、其生産手段の所有者たる階級も亦、次第に經濟上及び政治上の勢力を得來り、遂には舊生産手段の所有者にして現に社會を支配しつゝある階級と、政治的争闘を始むることと爲る。かくなれば、其が一定の社會組織の第二期であり、又階級成立の第二期である。さうして精神的方面に於ては、壓服され居たる階級が階級的自覺を起すにつれて、次第に其階級の利益を代表する所の新たなる思想（今日の所謂『危険思想』）が起つて來ることになる。

而して此等經濟上、政治上、及び思想上の争闘に於て、若し新興階級が勝利を得ることになれば、そこで始めて社會的革命が成就するのである。猶其場合に、若し新たなる經濟組織が古き經濟組織に比し、根本的に其性質を異にし居るが如きことあらんか、社會思想も亦是が爲に全く面目を一變し、新たなる政

治上の制度、新たなる宗教上の信仰、新たなる道徳上の觀念、新たなる藝術上の趣味、新たなる哲學上の思想と云ふやうなものが、相次いで起り、此の如くにして社會の進化は一大飛躍を爲すことに爲る。

扱て以上述べたるが如き見地よりすれば、總て過去の歴史は階級争闘の歴史であると言ひ得らるゝ。乍併、此の如き階級争闘の歴史は、今や漸く其終末に近づきつゝあるものにて、即ち今日の資本主義的組織が倒れて、社會主義的組織に代りて實現せらるゝに至るならば、總ての生産手段は社會全體の公有となるが故に、そこで初めて階級の別なき社會が生れる。——茲に階級と謂ふのは經濟的階級と云ふ意味であつて、言ひ換ふれば、同一の社會内に、一方には生産手段を獨占して居る者があり、他方には之に對して生産手段を所有し居らざる者があり、其結果前者は後者に屬する人々の剩餘労働を奪ひつゝあることを謂ふ。階級の區別を撤廢すると言へば、例へば一の工場内に於ても、技師と

？、  
そのやうな

か監督とか普通の労働者とか云ふやうに色々な仕事の分擔があるのをば、皆廢めて仕舞ふことのやうに誤解して惡口を言ふ人があるが、さう云ふ意味ではない。——扱て生産手段が總て社會の公有となれば、初めて階級の區別のない社會が實現され、從て又、初めて全社會から階級争闘が跡を斷つことになる。而して斯くなつて後、初めて人類の眞の歴史の第一頁が始まるのであつて、其見地よりすれば、總て從來の歴史は人類の眞の歴史の前史に過ぎざるものである。マルクスは此の如くに觀察したのである。

此節福田博士などが唱へて居らるゝ議論の中に、——社會民主主義に對する評論の中に、——社會民主主義は眞正のデモクラシーではない、何となればこれは労働者階級の專制を主張するものだからと云ふやうな説がある。併ながらマルクスの主張した所は、階級争闘と云ふ方法で以て社會的革命をするけれども、其階級争闘といふ方法に依つて實現せんする所の社會——社會主義の社

會——は、階級の別のない社會であるから、マルクスが理想とした將來の新社會を批評するに當つては、吾々は今日の社會で醸成された所の資本主義的思想のカテゴリを持つて來て、この所を考へてはいかぬ。社會主義が實現されたならば、労働者が専制をして困るであらうと云ふことを氣遣ふ人があるが、其新社會は階級の別のない社會であつて、資本家と云ふ階級は無くなつて仕舞ふのである。そは世を舉げて總ての人が何等かの労働を分擔する社會である。新組織の原則は舉國労働者主義である。病人と子供と不具者と、さう云ふ労働能力を有せざる以外の人間は、皆社會の爲に働かなければならぬと云ふ舉國労働主義であるから、其社會には労働者以外に人は居ないのである。労働者が我儘をし専制をすると云ふことは、人間が自然に對し専制をし我儘をすると云ふことに外ならぬので、至極結構なことである。之は餘談であるけれども、ちよつと一言致して置きます。

以上述ぶるが如き趣意により、マルクスは、從來の歴史は總て序幕に過ぎぬのであつて、これからして人類の眞の歴史の第一頁が始まる、と考へたのである。其點に於て、彼は現代を以て、人類の歴史の未曾有なる一大轉機だ、と看做したのである。若し然りとすれば、マルクスの唯物史觀の議論から言へば、物質的生産力の發展と云ふものが、現代に於て、今までの歴史に曾て見たこともない程度の非常なる一大飛躍をしたと云ふことが無くてはならぬ筈であるが、考へて見ると、實際又さうなのである。此點に就ては私は從來屢々論文や著書に書いたことであるが、簡單に其要領を繰り返し述ぶるならば、元來人間と云ふものが、他の一切の生物を支配して今日の如き文明を爲すに至つた其最初の起りは、之を物質的方面から言へば、吾々が道具を製造し得るに至つた爲である。犬とか猫とか牛とか馬とか云ふものは、皆手を突いて居る所の所謂四足獸である。所が一切の動物の中で、吾々人間と云ふもののみが初めて二本の脚で

直立することが出来て、これが爲め吾々は初めて手を持つことが出来た。さうして其手の延長となれる所のものが道具である。手が自由になつたので、吾々は初めて道具を製造することが出来た。あらゆる生物の中で、道具を製造し得る能力を有する者は、只人間あるのみである。さうして此道具をば人間が造り出したと云ふことが、人間の物質的生産力が發展をし出した抑もの起原である。其時に一切の生物と人類との物質的文明の性質が分たれた。蜂や蟻の社會を見ると、非常に澤山の個體が相集つて、互に分業——分業は道具に次いで生産力の發展に効果のあるものである——をやつて居るが、悲いことには彼等は道具を持つて居らぬので、到底十分なる物質的文明を發揮することが出来ないで居る。又虎でも象でも獅子でも、何れも驚くべき力を有するに拘らず、大切な道具を製造し得ぬが爲に、彼等も亦人間の發明した道具に依つて征服されて仕舞つて居る。人間が道具を製造し始めたのは、それは何千萬年、何億年かの大

昔のことであつたらうが、兎も角その時に、人間と他の一切の動物との物質的文明の間に、程度の差でなしに、性質の差と言つても宜い區別が出来て来た。さうして其れ以來長いこと掛つて、道具が少し宛々改良され、之に伴うて人間の物質的文明が進んで来た。所が第十八世紀の末葉に至つて種々の機械が發明され、道具なるものが一躍して機械となつた。若し道具を以て手の延長とすれば、機械は更に其道具の延長されたものであつて、是が爲に吾々の生産力の激増したことは、眞に驚くべきものがある。或方面に於ては數百倍、數千倍にも増加して居る。これは實に人類の歴史あつてこのかた未曾有のことである。簡単な一例に就て考へて見ても、私は過日信州の講演を終へてから當講演會に臨む爲に、——信州の山奥から此東京へ出て来るのに、——只一晚汽車の中で寝て居ただけである、寝て居て何も知らぬ中に、翌朝は早や當地に到着して居る。これが維新前であつたならば、どれだけの時間と勞力と費用とを要したか。

此一例に就て考へて見ても、機械の發明と云ふことが如何に吾々の物質的文明の上に影響を及ぼしたか、略ぼ想像することが出来ると思ふ。此等の事を考へて來れば、今は非常なる時代であると思はなければならぬ。少くとも私はさう信じて居る。今の時代は、昔人間が道具を發明することにより、有ゆる動物の中から抜け出て來て、初めて『人類の歴史』の第一頁を歩み出したのと同様の趣を以て、今や其人間が機械を發明して、今までの歴史とは全く打つて變つた、新たなる人類の歴史——『人類の眞の歴史』——の第一頁を描き出さなければならぬ時代だ、と考へる。これは私の考へであるが、兎も角マルクスは、人類の眞の歴史は此次に來るべき社會組織から始まるのであつて、今までの歴史は單に其前史に過ぎなかつたものである、と見たのである。これで第二段の唯物史觀は終へ、明日と明後日とで、マルクスの思想の中、残れる部分の全體の御話を終る積りであります。(以上、大正八年八月十二日、午前七時より九時まで、講了)

### 第二段 資本主義的經濟組織の批評

此前の時間にマルクスの唯物史觀の極く大體を御話致しました。それに就て一々批評を加へて行く、大變長くなつて、到底興へられたる時間の中にマルクスの思想全般に亙る御話を終へることが出来ぬから、之に對する私の批評は凡て省き、今日は直ちに第三段の資本主義的經濟組織の批評と云ふ所をお話する積りである。

丁度マルサスの人口論は貧乏人が聞くと餘り心持の良い議論でないと同じやうに、マルクスの經濟論は有産階級の人々が聞くと餘り心持の良い議論でないかも知れぬ。併し私はマルサスの議論を紹介する時にも、彼の議論をば出來得る限り力強く説明した積りである。それと同じやうにマルクスの思想をも、餘り之を緩和することなしに、其儘茲に御話して見たいと思ふ。大多數の御方は或は有産階級の人々であるかも知れぬが、暫く御免を蒙ります。



## 第一、労働価値説

第一に述べべきものは、マルクスの労働価値説である。然り、彼の経済論を理解する爲には、吾々は先づ第一に彼の労働価値説なるものを理解するの必要がある。茲に労働価値説と謂ふのは、物の価値は是が生産に要したる労働の分量に依つて極まると云ふ説であつて、マルクスは此説を根據として其上に彼の有名なる剰餘価値説を打立てて居るのである。然るに茲に一言を費して置く必要があるのは、斯る思想は其由來が頗る古いと云ふことである。例へばアダム・スミスは其著『諸國民の富』の第一編第五章に於て、『労働は總ての貨物の交換価値の眞實の尺度である』(Labour is the real measure of the exchangeable value of all commodities)と述べ、又同じく第八章に於ては、労働者の報酬に就て次の如く述べて居る。『土地の占有及び資本の集積未だ行はるゝに至らざる最初の状態に於ては、労働の全生産物は労働者に屬したり』<sup>(1)</sup>。『然るに労働者が彼自身の全

<sup>(1)</sup> Wealth of Nations. (Cannan's ed.), Vol. I. p. 66.

生産物を享受せしが如き最初の状態は、土地の占有及び資本の集積初めて行はるゝに及び、其後は繼續せざるに至れり』<sup>(2)</sup>。斯く書いてある。思ふに土地及び資本の獨占行はるゝに至りてより、労働の生産物が全部労働者に歸屬せざるに至りし這個の事實は、甚だ注意すべき現象だと謂はなければならぬが、アダム・スミスは唯以上の如く述べて居るのみであつて、何が故に、土地の占有及び資本の集積が行はるゝに至れば、労働者は其労働の生産物全部を享受することが出来なくなるか、其理由に至つては、彼は毫も是が説明を試みんとはせず、唯單に事實を事實として記述して居つたのみである』

リカアードの労働価値説は、此アダム・スミスの説を承けて更に之を發展せしめた物である。リカアードの意見に依れば、労働は『交換価値の本源(the original source of exchangeable value)』であつて、『凡て物の価値の大小は、是が生産の爲に投ぜらるゝ所の労働の多少に應じて定まるものである』<sup>(3)</sup>。凡て物の価値

<sup>(2)</sup> Ibid, p. 64.

<sup>(3)</sup> Principles, (Gonner's ed.) p. 8.

と云ふものは、其物の生産の爲に費された労働の分量に依つて極まる。斯う云ふのである。尙彼は之に引續いて、労働の價值——即ち労働者は其労働を資本家に賣りて一定の賃金を貰ふ、それが労働の價值である——に就て、極めて注意すべき意見を述べて居る。彼の説に依れば労働其ものの價值と労働の生産物の價值とは決して同じものではない。<sup>(4)</sup>——茲に労働の生産物の價值と謂ふのは、労働者が造り出した生産物全體の價值のことである。(一ヶ月間に十萬圓の品物を造り出したならば、その十萬圓が労働の生産物の價值である。それから労働そのものの價值と云へば、労働者が賃金として貰ふ所の高のことである。(百人の労働者が一ヶ月間に一萬圓の賃金を貰へば、それが一ヶ月間に於ける百人分の労働の價值である。リカードはこの労働そのものの價值と労働の生産物の價值とは同じくならず、と言ふのである。——言ひ換ふれば、労働者は其労働の報酬として労働の生産物全體を貰ふ譯でない、其生産物の一部分を報酬として受

(4) Ibid, p. 9.

取るに止まる、と言ふのである。然らば其労働の代價は如何にして定めるかと云ふに、彼の説に依れば、『労働なるものは、凡て賣買せらるゝ所の、而して其分量を増減し得らるゝ所の、一般貨物と同じやうに、自然價格 (natural price) と市場價格 (market price) とを有する。さうして労働の自然價格とは、労働者をして其數を増減することなしに、互に其生活を維持し其子孫を繁殖せしむるに必要なる所の價格である。』<sup>(5)</sup>言ひ換ふれば、労働の價值は、労働そのものの生産の爲め必要とせられる所の労働の分量、即ち労働者及其家族の生活を維持するに必要な貨物を生産する爲めに必要とせらるゝ所の労働の分量に依つて極まる。斯う云ふのである。以下暫く同じ事を繰返し説明いたします。

先づ自然價格及び市場價格と云ふ言葉の意味を説明しなければならぬが、此等の概念はアダム・スミス以來歴代の經濟學者が用ゐて居る所の概念である。簡單に其を説明すれば、例へば此所に一つの振子があるとす。其振子は、實

(5) Ibid, (Chap.V.), p. 70.

際に於ては、始終風が吹いて幾分かは必ず其周囲の空氣が振動して居るからして、常に左右に動搖して居る。之を價格に就て言へば、其振子が刹那々に占むる地位が、恰も市場價格に相當するのである。例へば米の價は毎日上つたり下つたり、始終動き通して居るが、その日々に定まる所の價格が、所謂市場價格である。而かも其市場價格なるものは、絶えず動搖しながら、一の自然價格を中心として常に之に近づかんとしつゝあるものである。丁度振子が或は右に或は左に常に動搖しながら、而かも絶えず中心點に靜止せんとする傾向を有して居ると同じやうに、市場價格が之を中心點として絶えず近づかんとして居ると看做し得べき、一つの自然價格なるものが、考へ得られるものである。もう一つ外の例を申せば、海の水或は湖水の水。是は或時には風が吹いて非常に波が立つて居ることがあり、又或時には非常に靜で水面が鏡のやうなこともある。併しながら實際を善く見ると、假ひ水面は一見すれば鏡の如くであつた場合で

も多少の小波は常に動いて居るので、幾何學で言ふやうな平面の状態を呈することは絶對にない。併し海の水は、此の如く絶えず動搖しながら、而も又常に水平を保たんとする傾向を有するが故に、吾々は思惟の便宜の爲に、水平面と云ふものを頭の中に描くことが出来る。一切の物の價格は絶えず動搖して居るが、其動搖は常に或中心點の上下を動いて居ると看做し、日々動いて居る市場價格の中心たるべき點を捕へて、吾々は自然價格と云ふ概念を描くことが出来るのである。自然價格及び市場價格の意味は此の如くである。さうして是は後

の話に係ることであるが、マルクスの價值論に謂ふ所の價值なるものは、此自然價格に依つて表現せらるべき價值を指して居るのである。御承知の通り、價值とは物の値打であり、價格とは物の値段である。物は一定の價值を持つて居る、其價值を貨幣で見積ると、それが其物の値段になる。其値段、其價格なるものに、市場價格と自然價格との二つがある。吾々はさう云ふ二つの概念を作

ることが出来る。さうしてマルクスが單に價值と謂ふのは、この自然價格に依つて表現せらるべき價值を指して居るのである。さう云ふ譯だと、私は解釋して居る。

本筋に立ち戻つてリカアドーの御話を續けるが、今彼の言ふ所に依れば、凡て物の價格に自然價格と市場價格との區別があると同じやうに、労働の價格にも亦自然價格と市場價格との區別がある。さうして此労働の自然價格なるものは如何なる所に定まるかと云へば、丁度物の價格と同じやうに、そのものの生産の爲め費されたる労働の分量に依つて極まる、と斯う云ふのである。例へば私は朝來此所で一定の労働を提供して居るが、其労働を私が此所で生産する爲には、私は飯を食つて來なければならぬ。嘗に私自身が飯を食べる必要があるのみならず、私は私の妻子を養はなければならぬ。家族を持つて其子孫を繁殖して行かなければならぬ。それでなければ、私が死んで仕舞ふと、労働の供給が

絶えて仕舞ふことになる。それであるから、労働を——私が此所に提供して居る其労働を——生産する爲に費さるべき労働の分量と云へば、私と私の家族との生活上の必要の爲に一定の貨物が必要であるが、其等の貨物を生産する爲には又一定分量の労働が必要である、——その必要とせらるゝ所の労働の分量を指すのである。さうしてリカアドーは、此労働の分量によつて労働の價值は極まる、と言ふのである。

リカアドーの労働價值論とは此の如きものである。さうして此範圍に於ては、後に説く所に依つて明かなる如く、マルクスの労働價值論及び剰餘價值論と、其議論の立て方が殆ど符節を合する如くである。既にマルクスの労働の價值論を御承知の方は、以上述べ來つた所によつて、如何にリカアドーに依つてマルクス以前既に彼と同じやうなる思想が述べられて居るか、と云ふことを首肯せらるゝ譯であらうと思ふ。そはマルクスの労働價值論及び剰餘價值論と其議論

の出方が殆ど同じことなのである。然るにリカアドーはアダム・スミス、マルサスと共に資本主義経済学の建設者の一人であるに反し、マルクスは社会主義経済学の建設者であると云ふやうに、兩者の立場が全然相違して居るのは、一見すれば如何にも不可思議のことであるが、其實リカアドーは、労働者が自ら生産したる価値の僅に一部分をば其賃銀として受取りつゝ、あることを以て、経済上の自然的法則に基く已むを得ざるの現象となしたるに反し、マルクスは之を以て資本家による掠奪となし、且斯かる掠奪関係を廢止するの目的を以て、此の如き経済上の法則を必然的ならしむる所の資本主義の経済組織を廢止し、之に替ふるに掠奪關係の絶無なるべき社会主義的組織を以てせんことを主張するに至つた譯である。即ち兩者が略ぼ同一の事實を認識しながら、其結論が甚しく相違するに至つたのは、主として其立場の相違に基くのである。惟ふに資本主義の経済組織を辯護する爲の武器は、リカアドーに依りて略ぼ完成されたと

云つても差支ないのであるが、今マルクスが出て、敵の持てる武器そのものを利用して敵を討つに至つたと云ふことは、頗る興味あることである。先達から屢々引用した卵の例で言へば、卵が成育するに連れて、卵の殻の破れる時期が近づくのであつて、即ち卵が成育し切つたならば、其刹那に卵の殻が破れて仕舞ふ。此の如くにして、凡て物の成長發達と云ふものは、それ自身の中にそれ自身を破壊すべき要素を準備して來るものであつて、之は社会組織に就て言うても、社会思想に就て言うても、凡て同じことである。要するに資本主義の経済学は、アダム・スミス、マルサスを経、リカアドーに至るに及んで略ぼ完成したのであるが、而かも其完成の刹那、既に其母胎内には遠からず社会主義の経済学を生むべき十分なる準備を整へたるもの、と見るべきである。然らば舊派経済学の此労働價值論は、マルクスに依り社会主義の経済学の建設の爲め如何に利用せられたか、其事を是から述べて見たいと思ふ。

却説マルクスは労働価値説を以て議論の端緒を開いて居るのであるが、其労働価値説と謂ふのは、大體次の如きものである。

凡て労働に依り復生産せられ得る商品の價值は、之が生産の爲め必要とせらるゝ社會的労働の分量に依つて定まる。

今此命題を正當に理解するに就ては、注意すべき事項が少くない。

(一) 先づ其大體の意味より説明せんに、例へば茲に一の盆があり、盆の上に一の茶碗がある、さうして盆の價は貨幣で言表さば一圓であり、茶碗の價は二十錢であるとする。然る時は、盆の價は茶碗の價の五倍に相當する譯であるが、之は何故であるかと云ふに、マルクスは之に答へて、盆を作り出す爲には、茶碗を作り出す爲に要する人間の労働の五倍だけの労働を要するからである、と云ふのである。

(二) 尤も茲に、或貨物の生産の爲に要する労働と云ふは、其貨物の生産の爲め直接に費さるゝ労働(マルクスの所謂「生ける労働」)のみならず、間接に費さるる労働(マルクスの所謂「死せる労働」)をも包含する。故に彼はいふ。

『一個の商品の交換價值を計算するに當りては、吾々は、最後に使用されたる労働の分量に加ふるに、其貨物の原料を作り上げる爲に以前用ひられたる労働の分量と、及び此等の労働を助くる爲の器具、道具、機械及び建物、の上に費されたる労働とを以てしなければならぬ。<sup>(1)</sup>』

即ち一個の盆を作る爲に要する所の労働と謂ふは、盆の製作に従事する者が費す所の直接の労働は勿論、盆の材料たる木材を作り出す爲に費さるべき労働、盆を作る際に用うる道具機械等を作り出す爲に費さるべき労働、盆を製作すべき仕事場を建築する爲に費さるべき労働等を總て包含するのである。尤も道具、機械、建物等は、一個の盆を作り上げる爲に全部消耗されるのでは無いから、

(1) Marx, Value, Price and Profit, pp. 60, 61. 山川、堺雨氏編輯  
「社會主義研究」第一卷第二號7頁。

一個の盆の生産に要する労働の分量を計算するに當つては、此等の道具、機械、建物等の生産に要したる労働の全部を計上すべきでは無い。例へば此等の道具、機械、建物等が假りに十萬個の盆を生産するに役立つとするならば、此等の物の生産に要したる労働の十萬分の一が、盆の生産の爲に費されたる労働として計上されるべきである。

(三) 然らば其労働の分量は如何にして之を秤量すべきかと云ふに、マルクスは之に答へて、それは労働の繼續せらるゝ時間の長さによつて秤量されるべきである、と言ふのである。即ち彼は云ふ。

『使用價值又は有用物が價値を有し得るは、只其物に抽象的なる人間の労働が體現され物體化され居るが爲である。然らば、其價値の大きさは如何にして量らるべきか。曰くそれは之に包含せられ居る「價値形成物」即ち労働の分量に依りて量らる。而して労働の分量は其持續時間に依りて量られ、更

に労働の時間は時、日と云ふが如き標準に依りて量らる。』

(四) 此の如く労働時間の長短に依つて労働の分量を量ることとすれば、惰け者の生産したる貨物は、勤勉なる者の生産したる同一の貨物より、遙に多くの價値を有つと云ふ不條理なる結果を生ずべきであるが、マルクスの謂ふ所の労働の分量なるものは、此の如く或貨物の生産の爲に費されたる労働の分量に非ずして、或貨物の生産の爲に費されるべきことを社會的に必要とする労働の分量の事である。故に彼は資本論に於て次の如く述べて居る。

『人或は曰はん、若し商品の價値が其生産の爲に費されたる労働量に依りて決定せらるゝならば、労働者が怠惰であり又不熟練であるほど、其生産の爲め益、多くの時間を要すべきを以て、其生産せし商品の價値は益、大なるべしと。乍併、價値の本體と爲れる所の労働は、同質なる人間の労働であり、均等なる勞力の出費である。勿論總ての商品の價値に體現せられ

(2) 資本論、第一卷、第一篇、第一章、第一節、(獨逸原本) 第四版、S. 5. 英譯 p.45. Value, Price and Profit, p. 57. にも同様の記事あり。

つゝある社會全體の勞力は、無數の個別的勞力より成るものなれども、此等個々の勞力は、それが社會的の平均勞力 (Durchschnitts-Arbeitskraft) たる性質を有する限り、又此の如き社會的の平均勞力として作用する限り、換言すれば、或商品の生産に要する所の勞働時間が、平均上必要なる又は社會的に必要なる勞働時間を超過せざる限り、そは皆互に同様なる人間の勞力と看做すべきである。茲に社會的に必要なる勞働と謂ふは、其時其社會に於て正常と看做さるべき生産條件、並びに其社會に於ける平均程度の熟練及び強度の勞働を以て、一定の財を生産するに必要なる勞働時間を謂ふ。例へば、英國に於て、一定分量の絲を織物と成すために要する勞働が、蒸氣機械の應用に依りて、以前の半ばに減じたりとせんに、斯かる場合に於ては、手織業者は同じ仕事の爲め以前と同じだけの勞働時間を費しつゝ、ありとするも、其生産物は最早や其半分だけの社會的勞働時間を代表する

に過ぎざるものにて、從て之が價值も以前の半額に下落するものである。

之を要するに、或物の價值の大きさを決定する所のものは、其生産の爲め社會的に必要なる勞働、又は社會的に必要なる勞働時間である<sup>(3)</sup>。

『價值、價格及び利潤』と題する彼の小著にも、此點に關し同じやうな記事がある。序なれば之を左に引用する。

『余は「社會的勞働」なる語を用ひた、而して此「社會的」なる形容詞には種々の事柄が包含されて居るのである。或貨物の價值は其物の中に注入され又は結晶され居る勞働の分量に依りて定まると言ふ時、吾人の意味する所は、社會の一定の状態に於て、或る社會的の平均の生産條件の下で、使用せらるる勞働の一定の社會的の平均の強度及び平均の熟練を以て、之が生産の爲め必要とせらるる勞働の分量を意味する<sup>(4)</sup>。』

(五) なるはマルクスが問題とする所の價值なるものは、商品の交換價值であるこ

(3) 資本論、第一卷、第一篇、第一章、第一節

(4) Value, Price and Profit, p. 62.



とを、注意しなければならぬ。

アダム・スミス以來殆ど凡ての正統派經濟學者は、物の價值を分つて使用價值と交換價值として居る。例へば水は吾々の生活上極めて大切にして、其使用價值は甚だ大なれども、之と交換して他の有用なる貨物を得ること困難なれば、其交換價值は甚だ小なり。之に反し、ダイヤモンドは吾々の生活上缺くべからざるものに非ざれば、其使用價值は左まで大なりと謂ふを得ざれども、一粒よく千金に値するが故に、其交換價值は大なり、といふが如くである。而してマルクスの經濟論に價值と謂へるは、即ち此交換價值に就て設けられたる或種の概念——其事はなほ説明す——である。故に彼はいふ。

『或物は價值を有することなしに、使用價值を有し得る。そは人間に向つての其物の效用が、勞働に依つて生じたるに非ざる場合である。例へば空氣、處女地、自然の牧地、野生の木材等が、即ちそれである。又物により

ては、有用にして且人間の勞働の產物たるに拘らず、商品たらざるものがある。自己の生産物をば直ちに自己の欲望満足の爲に消費しつゝある者は、使用價值を生産すれども、商品(從て交換價值、從て又マルクスの所謂價值を)生産することなきものである。商品を生産するが爲には、常に使用價值を生産するのみならず、他人に向つての使用價值、即ち社會的の使用價值(從て交換價值、從て又マルクスの所謂價值)を生産しなければならぬ。最後に何等か有用の物體に非ざれば、價值を有することなし。若し其物が無用のものならば、之に費されたる勞働も無用に歸したる譯にて、そは勞働として計算さること無く、從て何等の價值をも形成せざるものである。』<sup>(5)</sup>

因にいふ。マルクス批評家の或者は——我國も現に此種の批評家を所有するの光榮を有す——マルクスが貨物の價值の成立を論ずる際、其物が勞働の生産物たることを必要とする點にのみ着眼し、同時に其物が一定の使用價值(即ち

(5) 資本論、第一卷、第一篇、第一章、第一節、(獨逸原本、第四版、S 7. 英譯 pp. 47, 48.)

有用性又は效用)を有せざるべからざるを看過して居る、と言つて非難するけれども、其非難の當らざることは、只上に引用したる一句を見ても明白である。彼は明かに、或物が商品たる爲には、——即ち交換価値を有するが爲には、——それは他人に向つて使用価値を有する物たらざるべからず、と述べて居るのである。物が交換価値を有する爲には、勿論一定の使用価値を有して居なければならぬが、併し其交換価値の大きさは、之が生産に必要な社会的労働の分量に依つて決まるものである、と言ふのが、マルクスの意見なのである。

(六)交換価値を貨幣で言表したるものは價格である。即ち物の交換上の値打を金銭で見積つたものが値段である。所が此價格なるものの概念には、自然價格及び市場價格の二種があり得る。このことは先程既に述べた所であるから、繰り返して其意味を説明することを略するが、要するにマルクスの價值論に謂ふ所の價值なるものは、此二種の價格の中、所謂自然價格に依つて表現されるべき

所の價值である。それ故マルクスは「價格は、それが價值の貨幣的表示に過ぎざる限り、アダム・スミスに依りては自然價格と稱せられ、佛蘭西の重農學者に依りては必要價格と稱せられたものである」と言ひ、又「價值及び市場價格との關係、即ち自然價格及び市場價格との關係は」云々と言ひ、或は「價值又は自然價格」といふ言葉を使つて居るのである。

即ちマルクスの價值論に謂ふ所の價值なるものは、或は簡單に、それは「自然價值」であると言つても可いのである。然るに既に述べたやうに、マルクス批評家の多くは最も屢、此點を看過し、彼の價值論を以て直ちに現實の市場價格を説明せるものの如く看做し、極めて無用なる且嗤ふべき攻撃をマルクスの價值論に加へ、勝ち誇れるが如き態度を爲しつゝある。乍併、多くの俗學者が容易に其『大誤謬』を指摘し得るが如き缺點をば、數十年に亙る潛心熟慮の間に於てマルクスが遂に之に想到し得ざりしと爲すは、餘りに人間の力を無視した仕

(1) Value, Price and Profit, p. 66.

(2) Ibid, p. 67.

業である。世のマルクス説の批評を讀む者は、——批評書によりてマルクスを知るは難し、眞にマルクスを知らんとする者は直ちに彼の著書に就くべきであるが、——宜しく十分の警戒を以て、多くの批評家の指摘せる『大誤謬』を受取るべきである。

(七)最後に注意すべきは、マルクスの商品と謂へるは、模型的の資本家的商品<sub>を指すのであつて</sub>、又彼の價值論は、此の如き商品に關する價值論である、と云ふことである。

元來マルクスは、純粹なる資本主義的經濟組織を假定して、其研究を進めたものである。然るに現實の社會は、如何に資本主義的に進歩したる所と雖も、必ず種々の混合物あるを免れざるものである。英國の首府たるロンドンに於ても、多くの家庭では自ら料理して自ら食ふのであつて、其の然る範圍に於ては、彼等は自給自足の孤立經濟を營みつゝありと謂ひ得らるゝ。管に炊事のみならず、洗濯、育兒等、主として婦人の手に待つべき仕事は、今も猶家庭内の經營に屬しつゝあるものが少くない。然るに斯かる自給自足の孤立經濟が行はれつゝある限りは、それは未だ社會經濟(マルクスの所謂生活の社會的生産)の一部を構成するに至らざるものにて、全く原始時代以降の遺物と看做すべく、固より資本主義經濟の埒外に屬するものである。一方に此の如き太古の遺物あるかと思れば、他方には道路公園乃至博物館圖書館の如きは、全く共產主義に依つて經營せられつゝある。天下の道路は内國人たると外國人たると、貧民たると富者たるとを問はず、『必要に應じて』自由に之を使用し得る。歩きたいと思ふならば、吾々は朝から晩まで毎日でも道路を歩行することが出来る。即ち道路は天下の共有財産に爲つて居る。ロンドンの大英博物館には殆ど價格を以て見積り難きほどの貴重なる世界の珍寶が蒐集されてある。然るに吾々は、——英國にとつては外國人たる吾々も、——一文の入場料をも支拂ふことなしに、朝から

晩まで毎日でも此博物館に出入することが出来る。即ち大英博物館は人類の共有財産に爲つて居るのである。此の如く見來れば、模型的の資本主義國と稱せらるゝ英國の首府にも、一方には太古の孤立經濟の遺物があると思へば、他方には將來の社會組織たる社會主義又は共產主義の萌芽がある。即ちそは決して純然たる資本主義を採用せるものに非ずして、實は種々なる制度を混用しつゝある譯である。然るにマルクスは一切の混合物を排除し、純然たる資本主義の經濟組織を抽象し、之を對象として其研究を進めたものである。思ふに此の如き混合物を排除し、研究の對象物を純化することは、凡ての科學に共通の研究法にして、例へば化學者が水を取扱ふ場合に、純粹なる水を取り來るが如く、毫も怪むを須むざることなれども、マルクス自身が明白に斷り居らざるが爲に、——性急なる批評家にとつて不仕合なるは、彼が教科書の編纂者に非ざりしことである、——批評家の多くは全然之を看過して仕舞ふのである。

マルクスは純然たる資本主義の經濟組織を以て其研究の對象とした。而して茲に注意すべきは、此の如き純然たる資本主義の經濟組織の下に於て、生産せらるゝ所の一切の貨物は、總て商品たる性質を有すと云ふことである。茲に商品と謂ふは、之を賣りて金儲することを其唯一の目的として生産せらるゝ所の貨物である。資本家は其資本を卸して或商品を生産する、さうして其商品を賣つて貨幣に代へ、再び其貨幣を卸して商品を生産する。勿論資本家は、貨幣を商品となし、商品をば復た貨幣となすと云ふ手續をば、只無意味に繰返すのでは無い。彼等が斯かる手續を繰返しつゝあるは、最初放下したる資本よりも、即より大なる資本を回收することに依り、一定の利潤を得んが爲であるので、即ち之をマルクス特有の方式にて現さば  $G-W-G(G+g)$  となる。貨幣——商品——増大貨幣（放下せし資本に利潤を加へしもの）、之が資本家的生産方法の一般的形式である。而して資本家は斯かる流通形式を頻繁に繰返すほど、益、大

なる儲をする譯である。故に資本家の好んで放資する所のものは、再生産の成るべく容易なるものである。造つては賣り、賣つては造り、生産と販賣とを出來得る限り頻繁に繰返し得る性質のものが、資本家の最も歡迎する性質の貨物である。故に一國が資本主義的に發達すればするほど、其國の農業は必然に衰ふ。勿論如何に資本主義的に發達したる社會に於ても、年一回又は二回の生産をし、か爲し得ざる農業に向つて、依然放資しつゝある資本家もある。骨董品や土地の賣買で儲けて居る資本家も居るであらう。乍併、此等の者は、資本主義の時代に於ける代表的の事業家では無い。今日の資本家的經濟組織は、斯かる性質の生産取引を其生命と爲せるものでは無い。要するに今日の資本家的經濟組織の下に於て模型的の商品と謂へば、一定の資本と労働とを費さば、何時にても、又何程にても、自由に複生産し得らるゝ性質の商品である。而して今マルクスの價值論の題目と爲れるものは、即ち斯かる商品に外ならざることを注意しなければ

ばならぬ。既に價值論の題目となれる商品は、一定の労働をさへ費すならば、何時にても自由に之を複生産し得らるゝ性質のものである。然らば其交換價值は、之が生産に必要な社會的労働の分量に依つて決定せらるゝの外はないので、即ち先きに掲げたるが如き労働價值論の根本命題、詳く言へば、『凡て労働に依り複生産せられ得る商品の價值は、之が生産の爲め必要とせらるゝ社會的労働の分量に依つて定まる』といふ根本命題が、樹立せらるゝことに爲るのである。

## 第二、剰餘價值説

マルクスの労働價值論なるものは略ぼ以上述べたる如くであるが、有名なる彼の剰餘價值論は更に之に基いて建設せられたるものである。

剰餘價值論は、之を剰餘價值成立論と剰餘價值實現論との二部に分ち得る。私は先づ其成立に關するマルクス所見の一斑を次に述べやうと思ふ。

## (イ) 剰餘價値の成立

剰餘價値に就て根本の問題となるは、それは如何にして成立するやといふ問題であるが、私は之が説明の便宜の爲め、一應其大體の要旨を述ぶるであらう。カアの『社會主義とは何ぞや』<sup>(1)</sup>と題する小冊子には、之が要領を摘んで次の如く述べてある。

『近世の機械を以てすれば、米國の賃傭労働者は、平均して一日毎に、少くとも十弗に小賣せらるゝ所の商品をば、生産することが出来又生産して居る。然るに彼等は、平均して、一日に二弗以上を得ることは出来ぬ。此等の事實は今日最早や否認すべからざる事實である。而して之に向つて一個の明瞭なる且満足すべき説明を與ふる者は、只社會主義者あるのみである。』  
『英國の大經濟學者アダム・スミス(一七七六年)及デヴィッド・リカード(一

(1) Kerr, What Socialism is? pp. 5, 6.

八一七年)は、久しき以前に、商品は其價値に於て、即ち其等の商品に包含せらるゝ所の必要なる社會的労働の分量に應じて、互に交換せらるゝの傾向あることを發見した。カアル・マルクスは(此思想を承繼して)一八六七年に『資本』第一卷を公にし、其書中に於て、彼は、後年社會主義の根本的原理の一と爲りし所の科學上の發見を記述した。

『マルクスの發見したる所に依れば、労働者が彼を雇ふ所の資本家に向つて賣る所の、日々の労働力そのものが一の商品である。労働者は他に衣食住を得るの途なきが故に彼は是非この商品を賣らなければならぬ。然るに此商品は他の商品と同じやうに、其價値を以て賣られる。而して其價値は労働者及び(將來に於ける労働者の供給を保證する爲に労働者の子孫も育てて行かなければならぬから)彼の家族の爲に必要とせらるゝ所の衣食住を生産する爲に必要な社會的労働の分量に依りて決定せられる。製造業者たる資本家は、機械、

原料、及び機械の運轉に必要な石炭其他の動力用の原料を買入れ、又機械を操縦するに必要な男女及び小兒の勞働力を買入れる。資本家が此勞働力を買入れるには、極めて有利なる理由がある。それはマルクスが初めて指摘したやうに、一個の極めて著しき特徴を有するからである。米國の勞働者は二時間足らずの内に彼が受取る所の勞賃と價值を同うするだけの富を生産する。乍併、彼はそれにて仕事を已める譯ではない。彼は六時間も、八時間も、時としては十時間以上も働く。さうして此等の時間内に於て彼は雇主に歸屬する所の剩餘價值を生産するのである。是れ資本家が其利潤を得る所の方法である。』

出來得る限り簡單に述ぶるならば以上の如くであるが、私は之に就て猶ほ若干の説明を加へて置かうと思ふ。

先づ剩餘價值なる言葉の意味から説明しなければならぬが、剩餘價值とは物

を作り出す爲に費されたる價值と、之に依つて作り出されたる生産物の價值との差額である。例へば一萬圓の費用を投じて一萬五千圓のものを生産したならば、一萬圓と一萬五千圓との差額なる五千圓が所謂剩餘價值である。

所が資本家的經濟組織の下に於ては、總ての生産業は資本家に依りて經營せられ、従て剩餘價值なるものが總て資本家の所有に歸しつゝある。否な資本家は此剩餘價值を得んが爲に生産業を營みつゝあるにて、即ち一定の剩餘價值を生ずといふことは、諸般の事業の根本動力である。儲が無ければ事業は總て中止されて仕舞ふのである。剩餘價值なるものは、生産の方面より見て此の如き重大なる意義を有するものである。而してマルクスが問題としたる所は、此剩餘價值は如何にして生産せられ、又如何にして資本家の所有に歸するに至るか、と云ふ問題であつて、此問題は、現代經濟組織を理解し且つ批評する爲に最も重要な根本問題の一である。

剰餘價值なるものは、常に生産の方面より見て此の如き重要な意義を有するのみならず、更に之を分配の方面より見るも、亦極めて重大なる關係を有するものである。蓋し今日の資本家的經濟組織の下に於ては、社會が資本家と無産者といふ二階級に分れて居る。勿論階級の區別なるものは色の區別の如きものにて、譬へば青と赤との中間には、青にも赤にも非ざる所の紫色のものもある筈であつて、即ち社會の爲には何等の勞働を爲さず只單に自己所有の財産より生ずる所得に衣食しつゝある純然たる資本家と、利子を生ずべき何等の財産を有せず専ら自己の勞働に依つてのみ生活しつゝある純然たる無産者との間には、無數の段階が在り得るのであるが、其にも拘らず、吾々は色に就て青と赤との區別を認むる如く、今日の社會に就て資本家と無産者との階級の區別を認め得るのである。生活の本據が財産所得に在りや勤勞所得に在りやに依りて、各、の人が資本家階級又は無産者階級の何れかに屬する。然るに其無産者階級

に屬する者は、財産より生ずる十分の所得なきが故に——人力車夫でも多少の貯金を有し、從て若干の利子を得つゝある者も少くはあるまい、併し小額の貯金の齎す僅少の利子を以て、彼及び彼の家族の生活を維持し行くことは到底不可能なるが故に、——彼等は自己の勞働力を他人に賣つて一定の所得を得るの必要に迫られる。彼等の所有に屬するものは勞働する力だけで、例へば絲を紡ぐにしても、巨額の資金を要する紡織機械は、彼等の到底入手するを得ざる所のものである。されば彼等は自己の勞働力を原料たる棉花の上に加へ、其勞働を絲の形に具體化せしめ、一定の有形貨物に結晶せしめて、然る後之を他人に賣ると云ふ譯に行かぬ。勞働力を或材料の上に加へぬ前に、働く力そのもの——マルクスの所謂直接の勞働力——を資本家に賣らなければならぬ。さうして其勞働力の代價として受取る所の彼の給料なり賃銀なりが、彼の唯一の主たる所得である。然るに彼等は終日勞働に従事しながら、其の得る所の報酬は極



めて僅であつて、一般に皆貧乏して居るのに、他方資本家階級に屬する者は、假ひ何等の勞働に服せずとするも、——資本家は總て何等の勞働にも服し居らずと云ふのではない、實際に於ては何れも多少の勞働に服して居るが、併し其勞働に對する報酬は彼の所得の極めて僅少なる部分を成すに止り、其の主たる所得は財産より生ずる不勞所得に外ならざる故に、假ひ彼等は何等の勞働に服せずとするも——常に一定の所得を得つゝあるのみならず、大なる資本を有する者ほど其所得は之に比例して益、大であり、從て彼等の資本は坐ながらにして次第々々に増大する。かくて貧富の懸隔は愈、甚しからざるを得ぬのである。之が今日の現状であつて、畢竟するに、剩餘價值なるものが資本家の所得に歸しつゝある事は、現代社會に於て富の分配の益、不平等となる根本の原因である。然らば斯かる現象は果して如何なる理由に基いて生ずるか。其點がマルクスの問題としたる所である。之を要するに、剩餘價值は生産の方面に於ては、

生産の因つて行はるゝ原動力となるものであり、分配の方面に於ては、不平等なる分配の益、不平等となる根本原因である。それ故マルクスは先づ此剩餘價值なるものを其研究の主要題目と爲したる譯である。

元來資本家の所有に屬する資本なるものが日々月々利子を産むと云ふことは、甚だ不可思議の現象と謂ふべきである。試に若干の金錢を土の中なり庫の中なりに仕舞つて置いて觀察するに、何時まで経つても少しも増殖しては居らぬ。して見ると、資本が子を産むのは、其原因が何等か社會關係——人と自然との關係に非ず、人と人との關係——に存在するに相違ない。然らば如何なる社會關係に基くか。それがマルクスの先づ問題としたる所である。

マルクスは此問題を明かにするが爲に、物の賣買に就て一の假定を設けた。それは、物の賣買は總て之が價值を標準として行はるゝと云ふことである。例へば一萬圓の値打あるものは、一萬圓の値段で賣買せらるゝと云ふ如くである。

勿論現實の社會に於ては、物の賣買は必しも其價值を標準とするものでは無い。乍併、之を價值以上に賣買するならば、賣る人は餘分の利得を爲す代りに、買ふ人は其に相當するだけの損失を爲し、又之を價值以下に賣買するならば、買ふ人は餘分の利得を爲す代りに、賣る人は其に相當するだけの損失を爲す譯であるから、結局社會全體に就て之を言ふならば、一方の得と他方の損と互に相殺して、社會の上には其賣買に依り何等の剩餘價值を生ぜぬことに爲る。されば、物の賣買が價值以上又は價值以下に行はれたりとするも、其結果は、社會内の或一員から他の一員に價值が移轉するだけのこと、社會總體の富の價值は是が爲に毫も増加するものではない。故に剩餘價值の成立は、流通（貨物賣買）の行程に於て起るに非ずして、生産（貨物製造）の行程に於て起るべきである。従て剩餘價值の成立を研究する場合には、物の賣買は凡て其價值を標準として行はるゝものと假定して、論を進めて差支ない。

扨て此の如く、貨物の賣買は凡て其價值を標準として行はるゝならば、事業家が貨物の賣買に依つて餘分の利得を爲す筈は無くなるのである。然るに事業家なるものは、一般に例へば十萬圓の資本を卸し之を十五萬圓にして回収し、十五萬圓の資本を卸して又之を二十萬圓にして回収して居る。此の如きは或種の資本家に限るに非ずして、資本家階級全體として、常に放下したる資本を増殖して回収しつゝある。マルクスは即ちこの放下したる資本と回収する資本との差額を名けて剩餘價值と謂ふのであつて、且この剩餘價值なるものは、流通の行程に於て生ずるに非ずして、生産行程に於て生ずるものなりと見たのである。然らば剩餘價值は如何にして生産の行程に於て成立するか。マルクスは此問題を解決する爲に、人間の勞働力なるものの賣買に着眼したのである。

私は嘗て拙著『社會問題研究』<sup>(2)</sup>にマルクス初期の論文『賃傭勞働と資本』の全文を譯載したことがある。諸君にして若し同書を参照し、特に其第四節以下を一

(2) 同書第四冊は全部マルクスの Lohnarbeit und Kapital の譯文より成る。

讀せらるゝならば、以下述べんとする問題の一斑は、マルクス自身の文章に依り、其處に平易に且明瞭に記述せられある事を發見せらるゝであらう。併し私は説明の順序として、茲には私の言葉を以て彼の意見の大體を述ぶるであらう。

既に述べし如く、今日の無産者即ち労働者なるものは、自分の働く力——マルクスの所謂労働力 (Arbeitskraft) ——を資本家に賣つて居る。即ち労働力といふ無形の商品は、常に資本家に依り無産者から買取られて居る。然るにマルクスの考に依れば、今日賣買せられて居る商品の中で、この労働力といふ商品のみは、餘分の價值即ち剩餘價值を産むといふ特色を有つて居るものである。

労働力も他の商品と同じやうに、或は價值以上に賣られ、或は價值以下に賣らるゝこともあらう。併し茲では前掲の假定に従ひ、労働力なる商品も亦其價值に於て賣買せらるゝものとする。然らば其價值は如何なる點に定まるべきか。蓋し人間の労働力の價值も、他の凡ての商品と同じく、其生産に必要な社

會的労働の分量に依つて決定せらるゝものにて、即ち労働者の受くる賃銀の高は、労働者自身及び其家族の生活を維持するに入用なる貨物を作り出す爲め、必要とせらるゝ所の平均労働時間に依つて、決定せらるゝのである。例へば一定の社會に於て一家族一日分の生活必需品を作り出す爲に要する所の労働の分量は、一人の労働者二時間分の労働に相當すと爲し、之を貨幣に見積りて假に二圓なりとせんか、即ち一日の労働力は二圓にて賣買せらるゝのである。一定の労働者が今日一日働いたとする、さうして明日も亦引續き同様に其労働力を發揮しなければならぬとするならば、彼は是非一定の食物其他のものを必要とする。食はず着ずして働き續ける譯に行かぬからである。又彼れ自身が老衰し又は死亡する時は、其後繼者が無ければならぬ。然らずんば、労働力の供給は中絶して仕舞ふことになる。故に労働力をば繼續的に供給するため、言ひ換ふれば、労働力の生産を引續き維持し行くためには、労働者自身及び其妻子の衣

食住が必要である。さうして其衣食住を生産する爲に、社會的勞働の二時間分を要するとすれば、之が勞働者の賣却する勞働力の生産に必要な社會的勞働に相當する譯であつて、假に金額に見積りて之を二圓とすれば、勞働力の代價即ち勞働者の受くる賃銀は、日二圓といふことになるのである。

然るに此勞働力なる商品は、剩餘價値を産み出すといふ一種の特徴を有して居る。その理由は、元來人間なるものは、自己の消費するよりも遙に餘分のもを生産する力を有するからである。勿論經濟狀態の極めて幼稚なりし時代には、人間の勞働力は此の如き餘裕を生ぜざりしが、經濟上の技術が進歩するにつれて、一人が働けば其に依つて數人數十人分の生活資料を作り出すことに爲つた。かくて人間は、例へば五の勞働に依つて生産されたるものを消費して、十の勞働を爲すだけの力を有し得るに至つた。さればこそ經濟社會は次第々々に進歩して來るのであるが、今資本家なるものは此點を利用して、例へば勞働

者に五の價を支拂つて其勞働力を買入れ、然る後其者に十だけの勞働を爲さしむるが故に、そこで始めて資本家の手に一定の剩餘價値が生ずることに爲るのである。更に前に掲げし例に依つて説明すれば、假に一定の社會に於て一家族一日分の生活必需品を作り出す爲に要する勞働時間を二時間と爲し、之を貨幣に見積りて二圓とするならば、凡て物の價値は之が生産に必要な勞働時間に依つて定まるといふ法則に依り、——而して凡て物の賣買は其價値に於て行はるゝといふ假定に基き、——勞働者一日分の勞働力は二圓にて賣買せらるゝ筈である。即ち資本家は二圓の賃銀を支拂つて、其勞働者が一日間働く力を買取ることが出来る。扨て此場合に、若し其資本家が勞働者をして一日二時間宛の勞働を爲すに止らしめたならば、資本家の手許には何等の剩餘價値も残らぬ筈である。乍併、實際に於ては、勞働者は二圓の賃銀を貰ひ、之を以て其生活の必需品を購入し且消費して生活を維持して行くのであるが、その二圓にて購入

し來る所の生活必需品は、實に二時間分の労働にて生産され得るものである。此の如く彼等は僅に二時間分の労働にて生産され得る物を消費しながら、之に依りて自分自身は八時間、十時間乃至十數時間の労働を爲し得るの力を有するのである。而して資本家は、労働者の労働時間を僅に二時間に止むるが如きことなく、成るべく之を延長し、彼等をして例へば一日十時間の労働に服せしむる。そこで前に引用したる米國の實例を以てすれば、労働者は一日に二弗以上を得能はざるに、彼等は一日毎に平均少くとも十弗に小賣せらるゝ所の商品を生産することに爲る。従て資本家は、彼が労働者に向ひ賃銀として支拂ひしものより遙に以上の価値を有する生産物を自己の所有と爲し得るのであつて、即ち二弗を支拂ひて十弗のものを得ることが出来る。さうして此差額こそ即ち謂ふ所の剩餘價值として、坐ながら資本家が其所得と爲す所のものである。之を要するに、資本家が全く何等の労働を爲さずとも、尙ほ一定の所得を有し得る

は畢竟彼等が労働者をして一定の時間内無報酬にて労働せしむるに基くものにて、従て又、労働者の労働時間なるものは、之を分つて二の部分と爲すことが出来る。即ち第一の部分に於ては、労働者は自己の生活の必需品又は之に相當するの価値を作り出すものにて、之に對しては、彼は賃銀として其報酬を受取る。假に名けて之を必要労働と謂ふ。然るに第二の部分に於ては、彼は只他人の利益の爲に労働するものにて、即ち何等の報酬を受くることなくして、只剩餘價值を生産するのみである。前の必要労働に對して假に之を剩餘労働と謂ふ。此の如く實質の上に於ては、今日の労働者は例へば十時間の労働に對し僅に二時間分の報酬を受くるに止まり居れども、而かも契約の形式面より云へば、其二時間分の報酬が十時間分の報酬なるが如くにして支拂はれ居り、表面は極めて公正なる賣買取引の形式に爲つて居るから、事の真相實質は只この表面の形式の爲に、凡ての人に向つて隠蔽されて仕舞つて居る。而かも此點に、今日の資本

家本位の經濟組織の根本的秘密が潜在する、とマルクスは看取したのである。

マルクスの考に依れば、總て階級的社會に於ける強者と弱者との關係は、其實質を同じうするものにて、即ち強者の階級は何時の世に在つても常に弱者の剩餘労働を奪つて居るのであるが、社會組織を異にするに従つて、大に其形式を異にし、從て如上の關係が表面上極めて明白になり居る場合もあれば、又極めて底に隠れて仕舞ふこともある。例へば奴隸の場合には其奴隸の労働全部が盡く主人の爲に奪はれて居るやうに見えるが、しかも實際に於ては奴隸の生産したるものの中幾部分は奴隸自身の生活を維持する爲に給與されて居るのだから、矢張り此場合に於ても、奴隸の労働は必要労働と剩餘労働とから成立つて居る。又農奴の場合を見るに、例へば英國の第十一世紀頃のマナア(Manor)に於ては、領主が廣大なる地面を所有し居り、其下に多くの家來が隸屬して居る。さうして耕地の五分の三又は三分の二は家來の者共が之を自己の爲に耕作し、

之より得たる收穫は各、之を自家の用に供するのであるが、残りの五分の二又は三分の一の耕地は、家來の者共が領主の爲に耕作する義務があるので、即ち此等の土地は同じく家來共に依つて耕作されながら、其收穫物は全部領主の所有に歸して仕舞ふ。家來共は此土地の耕作の爲に一ヶ年を通じて毎週二日又は三日宛定期の労働に服し、其他は農繁の際年二回又は三回、數日間の臨時労働に服するのであるが、此等の労働は即ち彼等の剩餘労働にして之は全然領主の爲に提供せらるゝ労働である。此の如く農奴の場合には必要労働と剩餘労働との區別が、表面上にも極めて明瞭に露骨に爲つて居る。然るに今日の資本家的經濟組織の下に於ては、此の如き關係が經濟上及び法制上極めて複雑巧妙なる形式の下に隠蔽され居るが爲め、經濟上の弱者が如何なる理由より不利の地位に陥りつゝあるかと云ふ根本の原因が、有力なる學者を以てしても猶ほ分らぬと爲つて居る。而かも強者對弱者の關係の本質は、古今を通じて皆一である。『無

賃の労働は、或場合には自發的に提供せられ、他の場合には強制的なるが如く見ゆる。一切の差は凡て此に歸する。<sup>(3)</sup>『マルクスは此の如くに見たのである。

これで剰餘價值成立の問題を終へたので、この次は剰餘價值の實現及び分配と云ふことを御話致す順序である。途中になるけれども、時間がないから、今日は是で終ります。(以上大正八年八月十三日、午前七時より九時まで、講了)

#### (ロ) 剰餘價值の實現及び分配

昨日から御話して來た剰餘價值説の續きであるが、昨日は剰餘價值の成立のことを御話を致したから、今日は其實現、——マルクスは Realisation と言つて居る、——の問題にはいる。

偕て昨日述べた所は、主として剰餘價值の成立に關する問題であつて、資本論第一卷の最初の二百頁餘りの所にある議論の概要である。然るに資本論全體

は三卷二千數百頁から成立つて居る大部の著述であつて、隨て以上の議論はマルクスの經濟論の根本基礎であるには相違ないけれども、是より進んで社會主義の結論に到達する迄には、尙幾多の複雑なる議論が重ねてあるのである。されば若し吾々が單に以上の議論から直ちに社會主義の結論を導き出すならば、それはマルクスの議論に對する甚だしき誤解である。既に述べたる如く、マルクスは今日の資本家が労働者の生産する所の剰餘價值を掠奪すると云ふ事實を認めて居る。併ながら彼は此事實を以て絶對的には善いとも悪いとも言つて居る譯ではない。剰餘價值を『掠奪する』(ausbeuten)と云ふ言葉が使つてあるので、所詮其處に道德的の非難を加へたやうな香氣のあることは争はれぬけれども、それは假にさう云ふ言葉を用ひたのであつて、少くとも道德的の判断が理論の出發點や根據になつて居るのではない。一寸簡單に考へて見ると、資本家が他人の剰餘價值を掠奪して居ると云ふことは、如何にも怪しからぬことにて、そは

<sup>(3)</sup> Value, Price and Profit, p. 85.

道徳上人道に許容す可らざることであるが故に、現代の經濟組織は直ちに破壊しなければならぬ、と云ふ議論が出て来るやうであるけれども、——又實際さう云ふ議論をして居る人も往々あるけれども、——併し斯の如く道徳上の判斷又は要求に基いて社會主義の理論を建設して居らぬと云ふのが、マルクスの所謂科學的社會主義の特徴である。道徳論をしないと云ふことがマルクスの特徴であると、よく言はれて居るが、それはさう云ふ意味に於てである。既に唯物史觀の所で述べた如く、マルクスの考に依れば、如何なる制度組織と雖も絶對的永久的に是が可否を論ずべきものではない。一定の時代に一定の制度、組織が存在して居るのは、其當時に存立すべき歴史上の理由があつて存立して居るのである。詳しく言へば、一定の經濟組織が社會の生産力の發展を助長する限りは、それは存続すべき運命を有つて居る。又其社會組織が社會の生産力の發展を束縛するに至る限り、——社會が正常なる進化の徑路を採る以上、——それは必

然的に崩壊すべき運命を有つて居ると云ふのである。隨て資本主義の組織も或時代には當然存立せざる可らざる理由があつて存立して來たもので、決して絶對的に之が善惡を判定すべきものはないと云ふのである。「吾々社會主義者は剩餘價値の性質を指摘すと雖も、而も賃傭制度を以て常に悪しきものなりと爲すに非ず、又今日此賃傭制度を維持しつゝ、ある資本家を以て悪人なりと爲すにも非ず。此賃傭制度なるものも、嘗ては之に先立ちし所の生産方法より、明に一歩を進めたものであつた。現に此制度の下に於て、労働は以前よりも其能率を高め、其生産力を増した。」<sup>(1)</sup>即ち資本主義の經濟組織も嘗ては善き組織であり、存立すべき理由があつて存立したのである。然るにこの同じ組織が、或程度以上社會の生産力が發達すると、次第に社會の生産力の發展を束縛し妨害せざるを得ざることになる。斯くて現制度は必然的に崩壊し、之に代りて社會主義の組織の樹立を見るに至るべし、と云ふのがマルクスの主張である。即ちマル

(1) Kerr, What Socialism is?



クスの社會主義なるものは、其基礎を道德上の要求に置いて居るのではなくして、科學上の運命論に置いて居るのである。人間と云ふものは、道德上の義務として斯の如き社會を實現しなければならぬと云ふだけの理想論をしたのではなくして、社會組織は——人間が自己の社會の退化滅亡を希望せざる限り——必然的に斯の如くなることと云ふことを科學的に立證しやうとしたものである。さうして斯の如く科學的の運命論を打ち建てる爲には、昨日來述べたる如き剩餘價值成立論に引續いて、剩餘價值は如何にして實現せらるゝか、又そは如何にして各種資本家の間に分配せらるゝか、と云ふやうな問題を講究する必要があるのであつて、是が爲には、總て資本家論三卷二千數百頁の議論を必要とした譯である。御承知の如く、資本論の第一卷は一八六七年に出て居るが、其の續卷の公刊は遙に後れて居る。嘗て私が或ものに書いて置いた如く、彼はその資本論を完成せんが爲めに、晩年は非常なる貧乏と病氣と戦ひつゝ、死ぬる最後の刹那に至る迄、彼は其志を捨てなかつたのであるが、併し彼は遂に第二卷第三卷を公にするに至らずして死んで仕舞つたのである。その死は、御承知の通り、一八八三年である。さうして彼が死後、彼の莫逆の親友たるエンゲルスが非常なる骨を折り、第二卷の草稿に手を入れて、之を世に公にして呉れたのが一八八五年である。さうして第三卷は、殊に訂正増補に骨が折れたので、その初めて公にされたのは、第二卷公刊後九年目の一八九四年である。斯の如く資本論なるものは、マルクスが其一生を費して尙ほ完成することの出来なかつたものであり、又彼の友人が其遺稿を整理する爲のみにも、前後十數年の歳月を費した程のものである。夫程のものを、私が今日是から二時間足らずの内に、遺憾なく其要領を摘み上げて御話することが出来ると自ら信じたならば、それは非常に僭越な愚蒙な考であると言はなければならぬ。それ故十分なる御話をするとは到底出来ないが、全く御話しないよりも増しだと云ふ位の意味で、

(2) 拙著「社會問題管見」の第一章「マルクスの資本論」と題する所に、彼が著作の苦心の一斑を語る。

極く大體を申上げて見たいと思ふ。

二八二

①  
マルクスの意見に依れば、剰餘價值の成立は既に述べたやうに生産の行程内に於て行はるゝものである。併ながら生産の行程内に於て既に成立したる剰餘價值は、流通行程に入りて初めて實現せらるゝものである。さうして此剰餘價值實現の議論が、主として資本論第二卷に載せてある譯である。言ひ換ふれば、一定の資本家が労働者を使用して一定の剰餘價值を包含する貨物を生産したとしても、それだけでは問題がまだ完結しない。資本家は其の生産したる貨物を消費者に賣却することに依つて、初めて貨物の價值を價格に實現し、一定の値打の物を一定の値段に實現し、剰餘價值を貨幣に替へて自分のポケットに入れることが出来るのである。例へば斯う云ふものがある（卓上のコップを指す）、さうして私は五だけの價值のものを費して労働者を雇ひ入れ、それに依つて

十の價值を持つた斯う云ふ物（コップを指す）を造り出したとする。其場合には此品物の中に五だけの剰餘價值が含まれて居るのであつて、即ち五の剰餘價值が生産されたと云ふことは、それは生産行程内に於ける剰餘價值成立の問題である。さう云ふ剰餘價值が成立しても——斯う云ふコップを造つたと云ふことだけでは——まだ剰餘價值が實現されて居ない。其剰餘價值を實現して私が一定の儲をするが爲には、此コップを人に賣つて、——最初五の費用を掛けて拵へ上げた物を今度は十の値段で賣つて、——さうして初めて五だけの剰餘價值を貨幣に實現し、之を自分の儲として私のポケットに入れ得るのである。即ち剰餘價值が成立すると云ふことと、一旦成立した剰餘價值が一個の値段（價格）に實現せらるゝと云ふこととは、問題が違ふのである。既に屢々述ぶる如く、資本家が貨物を生産するのは之を賣る爲である。如何ほど澤山の貨物を生産したりとて、首尾よく之を賣らなければ、其目的を達しないのである。即ち

二八三

剰餘價值を實現する爲には、生産したる貨物を消費者に販賣しなければならぬ。買手があると云ふことが、剰餘價值實現の第一の條件である。然るに既に生産行程の範圍にて生産されたる貨物を販賣する爲には、その販賣の爲に更に一定の資本及び労働を費さなければならぬ。乍併、此の如き流通行程の範圍に於て用ひらるゝ所の資本及び労働は、剰餘價值の立場よりすれば『不生産的』のものにて、即ち何等の剰餘價值をも生産するものでない。故に一人の企業者が此等の全部を負担するとすれば、その資本の一部は必ず之を不生産的に——即ち剰餘價值を生産せざる方面に——使用しなければならぬのであるが、實際社會に於ては企業者間に分業起り、その結果専門的に生産行程に従事する者と流通行程に従事するものとの區別を生ずる。然るに流通行程に従事する企業者——即ち貨物の販賣に従事する企業者——も、その資本に對し一定の利潤を得なければ満足せぬのであるから、其結果、生産業に従事する企業者は、生産行

程に於て成立せしめたる剰餘價值の全部を、自分のポケットに收むる譯には行かぬのであつて、必ず其幾部分を他の企業者に分配しなければならぬ。即ち生産者は其生産物を之が價值以下の價格にて賣り、之に包含せらるゝ剰餘價值の單に一部分をのみ自己の利得として實現し得るに止まる。例へば私が斯う云ふコップをば五の費用を費して生産し、さうしてそれは十の價值を有つて居るとするならば、此中には五だけの剰餘價值が含まれて居る譯である。併しその五だけの剰餘價值を全部實現する爲には、私は此コップをば最後の消費者に賣付ける迄の手續を取らなければならぬのである。然るに最後の消費者に此コップを賣付ける爲には、私は更に様々の勞力と資本とを費さなければならぬから、さう云ふ仕事は便宜の爲め之を外の人に任して仕舞ふ。他の商賣人に任して仕舞ふ。その代りに此コップを商人に賣る時は、それは本來十の値打を持つて居り、その中には五だけの剰餘價值を含んで居るけれども、私は之を七の値段で

賣つて仕舞ふ。そこでその品物の中に包まれて居る五の剰餘價值の中で、只二だけのものを私のポケットに入れて満足するのである。其次に、一旦私からコップを買取つた卸賣商人は、更に之を小賣商人に賣るのであるが、其時彼は、未だ實現されざるまゝに其コップの中に含まれて居る所の三單位の剰餘價值の中で、二だけのものを自分のポケットに入れ、つまり九の値段で之を小賣商人に賣る。さうすると小賣商人は、最後に残つて居る一だけの剰餘價值をば、最後の需要者に對し其品物を十の値段で賣ることにより、これを自分の利得として實現するのである。さう云ふ譯である。されば資本家的生産組織の下に於ては、貨物は原則として其價值通りに賣買されるものではない。既に屢、指摘せし如く、マルクスの價值論を批評する人は、マルクスの謂ふ價值と賣買價格とを同一視して、彼此と非難するのであるが、マルクスの論點は市場價格に在るのではない。資本主義的經濟組織の下に於ては、貨物は原則としてマルクスの謂ふ價

値と一致せざる價格を以て賣買せらるゝのである。貨物はその價值通りに賣買せられざることが原則である。又剰餘價值は、之を生産したる資本家のみが自己の所有と爲し得るに非ずして、之が生産及び實現——即ち貨物の生産及び販賣——に参加せる總ての資本家が、その分前に與るのである。加之、貨物の生産又は販賣に従事して居る所の各種の資本家が、——貨物の生産でも構はぬ、或は販賣でも構はぬ、兎も角其生産或は販賣に従事して居る所の各種の資本家が——他の資本家から資本を借入れて居つたならば、自分の手許で實現した所の剰餘價值の一部分をば、所謂利子として資本の貸主に支拂はなければならぬ、又或地主から土地——例へば工場の敷地——を借入れて居つたならば、彼は自分の所で實現した剰餘價值の一部分をば、更に地代と云ふ形式で其地主に支拂はなければならぬ。斯の如くにして生産行程に於て成立したる所の剰餘價值は、一切の資本家に分配されることになる。さうして其分配された所の剰餘價值と其

元本たる資本との比例が、所謂利潤の率 (rate of profit) と謂ふものである。年一割とか年八歩とか云ふ風に、資本家の利潤と云ふものは、一定の率を以て現はされて居る。労働者の賃銀は年何割とか何歩とか云ふ方法で言ひ現はされては居らぬが、資本家の所得である所の利潤と云ふものは、皆一定の率を以て言ひ現はされて居る。是は何故であるかと言へば、資本家の所得は、原則としてその持つて居る所の資本の大小に應じ、その額が極つて居るからである。大なる資本を有つて居る者は、一定の率に従ひ、これに相應する所の大なる所得を得、小なる資本を有するに過ぎざる者は、又同じ率に従ひ、之に應じて小なる所得を有するに過ぎないからである。

此の如く利潤なるものは、資本家的生産組織の下に於ては、原則として各資本家の資本の大小に應じて定まるものであるが、今其理由を如何にして説明する

かと云ふことは、マルクスの經濟論の中で最も面倒なる部分の一である。それは何故であるかと云ふに、既に述べたる如く、資本家の所得に歸する利潤なるものの泉源は、マルクスの言ふ所に依れば、生産行程に於て労働者の生産する所の剰餘價值である。而して此剰餘價值なるものは、生産上労働者を使役する爲に放下されたる資本、即ちマルクスの所謂可變資本 (variable Kapital) に依つてのみ生産されるのである。先程の例に従つて、假に私がコップの製造と云ふ事業を營んで居るとする。其場合に、私がどうして剰餘價值を造り出すことが出来るかと言へば、それは労働者から労働力と云ふ特種の商品を買入れて居るからである。勿論私はコップを造る爲に、色々な原料や様々な機械を買つて来る。所が其原料や機械の爲に卸した資本は、マルクスの所謂不變資本 (Konstantes Kapital) であつて、是は剰餘價值を生まぬ部分である。例へば私か十圓の原料を買つて、其原料をば斯う云ふコップに作り上げたとしても、元の十圓

が同じく十圓として製品の中に含まれて出て来るだけであつて、剰餘價值と云ふものは其處に少しも出て來ない。唯私は、機械や原料に若干の資本を下すと同時に、他方に於ては労働者の労働力を買入れる爲に一定の資本を下す。然るに労働者を雇入れる爲に費した方面の資本——即ち可變資本——は、これは剰餘價值を生むのである。五だけの價で買入れた労働力と云ふものは、その労働力を發揮せしめて居る内に十だけの價を有つたものを生産するのである。さうしてそれが、私が一定の不勞所得を儲け得る唯一の源である。これを要するに、私は事業の經營のため、どうしても機械や原料の方に若干の資本を下さなければならぬので、即ち一定の資本は是非これを不變資本として使用しなければならぬのであるが、此部分の資本は一向殖えて出るのではない。私が儲をするのは、労働者を雇入れる爲に一定の資本を下すからである。可變資本として若干の資本を利用すると云ふことが、剰餘價值の生まれる原因である。所が此可

變資本なるものが總體の資本に對して有する割合、言ひ換ふれば、労働者の雇入れの爲に使用せられつゝある資本額と、機械原料等に放下せられつゝある資本額と、此等二者の割合は、生産せらるゝ貨物の種類に依り甚しき相違がある。例へば、日本の實際に就て申さば、燐寸製造業の如きに在つては、全體の割合から言へば、労働者の雇入れの爲により多くの資本が下されて居る。然るに造船業とか製鐵業とか云ふものになると、機械原料等、即ち不變資本の方面に、より多くの資本が下されてある。此の如く貨物の種類に依つて、可變資本と不變資本との割合が甚しく相違して居るのであるから、その生産する所の貨物の種類に依つて、或種類の企業には、其放下資本に比すれば可變資本の割合大なるが爲め、其結果割合に多くの剰餘價值即ち利潤を生じ、又或企業には、其放下資本に比すれば不變資本(即ち機械建物等に放下されたる資本)の割合大なるが爲め、割合に小なる剰餘價值即ち利潤を生じ、かくて其の生産する所の貨物

の種類を異にするに従うて、各種の企業に利潤率の相違を來すべき筈になるのである。然るにも拘らず、實際に於ては、各種の企業を通じ其利潤率の略ぼ平均する所以は、果して如何なる理由に本くのであるか。此點が問題とならざるを得ぬのであるが、マルクスの説明に依れば、それは企業者間に競争の行はるゝが爲である。而して『競争に依りて利潤の平均率の成立する工合は、大體次の如くである。假に二個の事業をとり、其一是シャツ製造業の如きものにて、それには左して高價なる道具又は機械を使用すること無く、且一千圓の資本により數名の労働者を使用しつゝありとする。其二是鐵工業の如き種類のものにて、それには極めて高價なる機械が必要とせられ、其結果、資本放下額は使用せらるゝ労働者一人當り約數千圓に上りつゝありとする。今シャツ及び鐵製品の兩者が其價值を以て賣らるゝものとせば、資本家は鐵製品を作るよりシャツを作るとに依りて、遙に多くの利益を受くる譯である。乍併、實際に於ては、シ

ャツ製造業者等は互に競争するが爲め、シャツの卸賣直段を切り下げて、其價值よりも遙に低きものと爲し、其結果、此等の各小資本家は其労働者の労働力をば出來得る限り安く買ひ取れるに拘らず、平均して言へば、彼等自身の労働力に對する報酬に加ふるに、彼の放下したる小額の資本に對し略ぼ普通の利潤率を擧げ得るに止まる。然るに他方に於ては、製鐵事業に向つて百萬圓の資本を投ぜし大資本家は、鐵製品そのものは其價值以上に賣却せらるゝに拘らず、只僅に同じ歩合の利潤率を擧げ得るに止まるであらう。彼がシャツ製造業者より都合好き事情の下に在るは、その利潤率がより大なるが爲では無い、只彼の資本がより大なるに因り、利潤の總額が亦、より大なるが爲である。』此の如くにして、或貨物は其價值以下にて消費者に賣られ、或貨物は其價值以上に消費者に賣らるゝことに依り、總ての資本家の得る所の利潤は、略ぼ其放資額の大小に正比例することに爲るのである。

此の如くマルクスは考へたのである。であるから、昨日來屢、申すやうに、マルクスの謂ふ價值なるものは、何時でも市場價格の中心點たるべきものを指す、と思つて居なければならぬ。實際に於ては、物の價格は絶えず此中心點から離れて居て、之と一致して居ると云ふことはない。吊られて居る振子は、絶えず右に振り左に振つて居て、曾て中心點に靜止しないと同じやうに、實際に於ては、物の價格は決して其價值通りに賣買されて居る譯でない。併ながら、物の賣買價格は常に或所を中心として動いて居る、此中心點を探し出す必要がある、マルクスはそれを探して來て、茲に價值と謂うて居るのである。さうして此の價值なるものは、此前の時間に申したやうに、其物の生産に必要とせらるる所の社會的勞働の分量に依つて定まる、と斯う云ふのである。

### 第三、資本主義的經濟組織の必然的崩壊

今日の資本主義的經濟組織の下に於ける資本家の利益、即ちマルクスの所謂剩餘價值なるものが、如何にして生産せられ、又如何にして實現せられ、將た如何にして各資本家の間に分配せらるゝや、の問題に關するマルクスの大體の意見は、不完全ながら余が以上を以て述べた所である。仍て余は進んで更に次の問題に移らうと思ふ。次の問題とは、資本主義的經濟組織の必然的崩壊に關するマルクスの主張である。マルクスは、以上述べたるが如き、資本主義的經濟組織の作用に關する分析的解剖的研究を爲したる結果、此組織そのものの中に、幾多の矛盾衝突が包藏されて居り、且其等の矛盾衝突は、社會の生産力の進歩に伴うて益、甚しくなり、遂には此組織そのものをば根本的に破壊せざんば已まざるに至るべきことを、看破したのである。以下その事の大體を述べて見たいと思ふのである。

既に述べし如く、マルクスの唯物史觀に依れば、社會に於ける一定の生産力



は、必ず常に之に適應する所の一定の社會組織を産むものであり、從て又、社會の生産力にして變動する時は、之に伴うて社會の組織も亦必然的に變革さるべきものである。故に之を一定の社會組織に就て言ふならば、大體之を二期に分ち得るものにて、即ち第一期は、其社會組織が社會の生産力と正に調和し、之が發展の爲め最も都合好き關係にある時代である。然るに社會の生産力が或程度以上に發展すると、社會組織と社會の生産力との調和が破れ、從來生産力の發展を助長し居たる社會組織が、變じて却て社會の生産力の發展を妨害することになる。それが即ち一定の社會組織の第二期であるが、此第二期に於ても社會の生産力は社會組織の爲に束縛を受けながら尙ほ其發展を續ける。併ながら社會の生産力が發展すればする程、社會の生産力と社會の組織との間に於ける矛盾衝突が必ず甚しくなり、其極終に社會は衰退崩壞の運に向ふか、然らずんば社會的革命は、即ち社會組織の改造は、免る可らざる必然の勢となる。是

がマルクスの唯物史觀に於ける社會組織進化論の大體で、既に繰り返し述べた所であるが、今マルクスは此觀方を現代の資本的經濟組織に適用せんが爲に、以上述べ來りたる如き面倒なる經濟論を引出して來た譯である。マルクスの觀る所に依れば、資本主義的經濟組織——吾々が住んで居る現存の社會組織である所の此資本主義的經濟組織——の下に於ては、社會の生産力は嘗て非常なる速度を以て發展した。明治維新以來の日本に於ける生産力の發展を見ても、確に此組織の下に於て社會の生産力は一時非常なる勢を以て發展するものなることが分る。乍併、其生産力が或程度迄發展すると云ふと、其同一の資本主義的經濟組織が却て生産力の發展の爲に妨害を爲すことになる。斯の如く妨害を爲すべき關係が、資本主義其物の内に潜在して居る。度々同じ例を引くけれども、それは恰も卵の殻と雛との關係の如きものである。雛が育つ爲には卵の殻は是非必要である。其外殻の御蔭で、其殻内の卵が段々雛に成長して來るのである。

併し或る程度迄難が育つて來ると、其殻が必然的に難の發育を妨げる妨害物になる。其處まで進んで來ると、問題は殻を破つて難を活かすか、何時までも殻を破らせぬやうにして、聽て殻も難も共に死物にして仕舞ふか、その何れかである。斯かる問題が早晚起つて來ると云ふことは、最初から分つて居る。卵そのものの構造の中に、必然的にさう云ふ問題を起すべき内在的本質が備つて居る。資本主義的經濟組織も、マルクスの觀る所に依れば、それと全く同じことで、此組織の下に於て社會の生産力は非常なる勢を以て或時期迄は發展するけれども、社會の生産力が或程度以上に發展すると云ふと、それから先は必然的に、世の中の仕組と云ふものが、それ以上に社會の生産力の發展しやうとするのを抑へて、どうしても十分に展びぬやうに束縛して來る。マルクスは此の如くに考へ、さうして其事を科學的に客觀的に論證せんが爲に、上に述べたる如き剩餘價值の研究を試みた譯である。であるから、唯物史觀の條下でも既に申した

如く、資本論と云ふものは唯物史觀を離れては全く意味の無いものである。唯物史觀に於て彼が維持して居る所の社會組織進化論、その眼を以て現代の資本主義的經濟組織を觀、さうして其現代の經濟組織なるものは、一定の時機に達すると、吾々が社會の退化衰亡に甘んぜざる限り、それは必ず改造せられざるを得ざる運命にあることを、論證しやうとしたものが即ち資本論である。であるから、マルクスの立場から言へば、唯物史觀を離れて資本論は無い。故に彼は唯物史觀の公式を書き現はす時にも、それは自分の研究の結果到達した一般的結論であつて、既に一旦之を得たる後は、その後に於ける自己の研究の指南車となつたもの、であると言つて居る。剩餘價值の理論を押詰めて見ると、資本主義の經濟論は必然的に行詰らざるを得ざるようになる。社會の生産力の發展は、此組織そのものの内在的性質に依つて、次第々に束縛妨害せられざるを得ざることになる。マルクスはさう觀察したのである。私は今此點に關するマルクス

の議論をば、詳細に述べる時間と能力とを有たぬ者であるが、兎も角其大體を是から述べて見たいと思ふ。

既に屢、述べし如く、資本主義の經濟組織の下に於て、資本家が貨物の生産に従事して居る所以は、全く金儲けの爲である、利潤を得んが爲である、剩餘價值を得んが爲である。故に金儲けが六ヶしくなると云ふことは、生産力の發展が抑へられると云ふ事を意味し、金儲けが出来なくなると云ふことは、生産力の働さが止めらるゝと云ふ事を意味する。然るにマルクスの見る所に依れば、資本主義的經濟組織の下に於て、社會の生産力が發展すればするほど、資本家が利得を得ること、即ち剩餘價值を取得することが、益、困難になるのである。私は今便宜の爲め、項を二に分けて此點を説明しやうと思ふ。第一は剩餘價值成立の困難であり、第二は、剩餘價值實現の困難である。私は先きにマルクスの剩餘價值論を説明するに當りても、矢張り之を二段に分けて、先づ其成立に關する彼の説を述べ、次に其實現に關する彼の説を述べた。以下述べる所の二段の問題は、畢竟それに照應する譯である。

先づ之を生産行程の範圍に就て見るに、剩餘價值の成立そのものが、次第に困難になつて来る。

蓋し資本家にして成るべく多くの利潤を得んとすれば、その使用する所の労働者の働きよりして成るべく多くの剩餘價值を搾取る工夫をしなければならぬが、是が爲め第一に考へらるゝ方法は、労働者の労働時間を出來得る限り延長すると云ふことである。現に如何なる國に於ても、資本主義發達の初期に於ては、資本家は労働者に對して非常に長時間の労働を課して居る。殊に婦人、少年、幼年工等を一日十數時間に互つて使役したことは、諸國の資本主義の歴史

の明記して居る所である。農商務省の調査に成る「職事情」といふ印刷物を見れば、資本主義の初期に於ける殘虐性が能く分る。否な資本家は今日と雖も常に労働時間の短縮に反對して居る。労働時間を短縮したならば、一國の生産事業が衰へて仕舞ふと云ふのが、彼等常用の主張である。勿論之には一應の道理があるに相違ない。何故と云ふに、此前の時間にも申した如く、労働時間を延長すれば延長する程、資本家の手に歸すべき剰餘價値は多くなり、之を短縮すれば短縮する程、資本家の手に残る剰餘價値が尠くなるのであるから、所詮労働時間を短縮すれば——労働時間の短縮に伴ふ労働能率の増進といふことを無視し、労働時間の短縮そのものみに就て言へば、——資本家の利益は是が爲め必然的に減るのである。而して資本家の利益が減ると云ふことは、資本主義の經濟組織の下に於ては、其國の生産力が抑へられると云ふことと同じである。資本主義の經濟組織なるものは、資本家が一切の生産業を自己の營利の

爲に經營して行くと云ふ事を、其根本原則として居るのであるから、一切の生産の根本動力は剰餘價値を産み出す事にある。人口論の著者マルサスの言へる如く、それは實に利己（然り資本家階級の利己）を以て、社會的活動の根本動力と爲せる者である。故に資本家の利益——即ち搾取さるべき剰餘價値——が減少するといふことは、——此組織を維持する限り——それは確に一國の生産力の衰退を意味するのである。資本家が労働時間の短縮に反對するのは、労働時間を短縮すれば一國の産業が衰へると主張するのは、資本主義の經濟組織を動かす可からざる前提として考へれば、一應の道理がある。それ故彼等は、國家社會の利益の名の下に、何時でも労働時間の短縮に反對するのである。併ながら労働者が次第に勢力を得て來ると、或程度迄の労働時間の短縮は勢ひ已むを得ざる事になる。現に日本の如き労働者の勢力の極めて弱い國に於ても、兎に角工場法が制定されて居て、——それは歐米諸國の工場法とは全く比較にならぬ程のものであ

るにしても、——法律を以て、國家の權力を以て、労働時間が或程度迄制限されて居る。

ここで資本家は、成べく多くの剰餘價值を絞取る第二の方法として、その一定されて居る労働時間内に於て、労働の生産力をば出來得る限り増加する工夫をすることになる。即ち労働時間の延長の代りに、労働能率の増加と云ふ事が主たる問題になる。現に今日の日本に於ても、能率増進と云ふ言葉が、有力者の耳に快い流行語となつて居る。一定の時間に出來るだけ働かさうと云ふのである。さうして是が爲め最も有力なる手段は、機械の發明及び改造である。さればこそ資本主義の下に於ては、新たなる機械の發明及び從來の機械に對する改良が月々年々殆ど停止する所なく行はれ、此の如くにして、資本家は益、多くの資本を、機械——即ち不變資本——に卸さなければならなく爲つて來る。されば資本の集積次第に行はるゝに従ひ、可變資本も不變資本も共に増加するけ

れども、而かも全體の資本の中、不變資本の占むる割合は次第に増加し、之に反し可變資本の占むる割合は次第に減少して來る。然るに剰餘價值を産み出す資本は、可變資本に限られて居るのである。故に假ひ可變資本が剰餘價值を産み出す率は増加するにしても、資本全體の利潤率——即ち可變資本と不變資本とを加へたる資本全體に對する剰餘價值の割合——は、次第々に減少することに爲る。

以上の理由によりマルクスの有名なる『利潤率遞減の法則』(Gesetz des tendenziellen Falls der Profitrate)なるものが生れて來る。既に述べたる如く、資本主義の下に於て生産力を増加せんとすればする程、機械の應用は益、多くなる。然るに機械の應用が多くなればなる程、全體の資本に對する不變資本の割合は益、多くなる。不變資本の割合が多くなればなる程、總體の資本から言へば剰餘價值の成立する割合は益、減少し、従て利潤の率が益、下落する。此事をさし

てマルクスは利潤率遞減の法則と謂ふのである。然るに既に利潤率にして下落すとせんか、それは即ち資本家の金儲の割合が次第に減少すると云ふことを意味するのであるが、而かも金儲が段々六ヶしくなると云ふことは、社會の生産力の根本動力が次第に枯れて來ると云ふことを意味する。蓋し既に繰り返し述べたるが如く、今日の資本主義的經濟組織の下に於ける事業の經營は、資本家が利潤を得て次第に資本を増殖して行くと云ふことを、その根本動力として居るのである。而かも其原動力が、今日の組織の下に於ては、以上述べたるが如き理由により、自働的のブレーキをかけられることに爲つて行くのである。生産力を増加しやうとすれば、どうしても機械の應用を盛にしなければならぬ。而かも機械の應用を盛にすると云ふことは、資本家の所得に歸すべき利潤の率を低落せしむると云ふ結果を伴ふものであり、又た利潤の率が低落すると云ふことは、資本主義的經濟組織の下に於ては、生産の原動力が弱められると云ふ

ことである。それ故、どうしても其處に一個の自家矛盾が起る。此矛盾は、資本主義的經濟組織を動かすべからざる前提となす限り、到底解決することの出來ぬものである。故にマルクスは、この剰餘價值成立の困難といふことを以て、資本主義的經濟組織そのものに包含せらるゝ所の矛盾性の第一となしたのである。試に資本論第三卷第一分冊の第三篇『利潤率遞減の法則』と題する部分の數節を次に譯出して、彼が論法の一見本として置く。

『剰餘價值率は  $\frac{m}{c+v}$  (剰餘價值率) である。然るに此剰餘價值率は、既に述べし如く、之を利潤率に現す時は、それは  $\frac{m}{c+v}$  (剰餘價值率) なるが故に、不變資本の大きさ、從て又た全體の資本Cの大きさの異なるに從うて、全く異なるものとなる。即ち假に剰餘價值率を一〇〇%とせんか、剰餘價值Pは次の如くになる。

$$c=50, v=100 \text{ なる時は } P' = \frac{100}{150} = 66\frac{2}{3}\%$$

$$c = 100, v = 100 \text{ なる時は } p' = \frac{100}{200} = 50\%$$

$$c = 200, v = 100 \text{ なる時は } p' = \frac{100}{300} = 33\frac{1}{3}\%$$

$$c = 300, v = 100 \text{ なる時は } p' = \frac{100}{400} = 25\%$$

$$c = 400, v = 100 \text{ なる時は } p' = \frac{100}{500} = 20\%$$

此の如く不變資本が、從て總體の資本が、物質的に其範圍を擴大するにつれて、其等の價值の大きさも亦、——同じ比例には非ずとするも、——次第に増加するものとせば、労働の掠奪の度合は不變にして、從て剩餘價值（成立の）率も亦一定し居る場合にても、之を利潤率に現す時は、次第に下落することとなる。

4 『若し更に進んで、資本の構成に於ける此の如き漸次的變化が、常に個々の生産範圍に於て起るのみならず、總ての、又は少くとも最も重要な、生産範圍に互りて、何等かの程度に於て起り、かくて一定の社會に屬する總體

剰餘價值率ハ亦  
同一ナリヤ。!

の資本の有機的構成が平均的に變化するに至るものとせば、不變資本が可變資本に對する關係に於て此の如く漸次に増加することは、其結果として必然的に、同一なる剩餘價值率の下に於て、即ち資本による労働の掠奪の度合は不變なる場合に於て、一般の利潤率の漸次的下落を來たすに至るべきである。然るに既に述べたる如く、資本家的生産方法の發展に伴うて、可變資本は不變資本との關係に於て、從て又、事業に投下せらるゝ總體の資本との關係に於て、比例的に減少するに至るものなることは、資本家的生産方法の一法則である。而して此事は畢竟するに、一定價額の可變資本によりて動かさるゝ所の同一數の労働者、同一量の労働力は、資本家的生産の内部に於て發展する所の特種なる生産方法の效果として、同一の時間内に、益、多くの労働手段、機械、及び總ての種類の固定資本、原料及び補助材料をば、——從て益、多額の價值を有する不變資本をば、運轉し、

加工し、生産的に消費するに至るものなることを、意味するに外ならぬ。此の如く可變資本が不變資本との關係に於て、從て又總體の資本との關係に於て、比例的に益、減少することは、社會的資本の有機的構造が益、高級に進むといふことと、同一である。そは又、労働の社會的生産力が益、發展し、その結果、機械の及び一般に固定資本の利用を益、盛にすることにより、次第に多くの原料及び補助材料をば、同一數の労働者にて同一時間内に、——即ち比較的僅かの労働を以て、——之を生産物となし得ることを、意味するに過ぎない。不變資本が此の如く次第に其價值を増加するに伴うて、——茲に不變資本の價值の増加といふは、不變資本を構成する材料の使用價值が實際に於て増加すると云ふことと、決して同じではないが、——生産物も次第に廉價となる。之を個々の生産物に就て見んか、生産の低級なる階段に比し、即ち労働に放下さるゝ資本が生産手段に放下さ

るゝ資本に對し遙に大なる割合を占めつゝある場合に比し、僅なる分量の労働を含むに止まる譯である。されば前に掲げたる表は、實は資本家的生産の實際の傾向を現すものである。而して之によりて見れば、可變資本は不變資本に對し比例上益、減少し、之に伴うて又、總體の資本の構成は益、高級になるのであるが、其直接の結果は、労働の掠奪せらるゝ度合は不變なるか、或は多少は高まることある場合に於ても、剩餘價值率は常に遞減的の一般利潤率となりて現はれ来る、と云ふことである。されば一般利潤率が次第に下落するの傾向を有すと云ふことは、労働の社會的生産力が益、發展するといふ事實に對する、資本家的生産方法特有の言表しに過ぎぬ。此事は、利潤率が其他の原因によつては一時的の下落をすることもない、と云ふのではなく、只資本家的生産方法の本質に基き、一個自明の必然性として、剩餘價值の一般的平均率は、資本家生産方法の進歩に伴ひ、次第



に下落する所の一般的利潤率となりて現れ來るべきものなることを、主張するのである。使用さるゝ所の生きたる労働は、之によりて動かさるゝ所の物體化せる労働、即ち生産的に消費せらるゝ所の生産手段の分量に對する關係に於て、次第に減少するが故に、從てこの生きたる労働の中、無代價にて使用され、剩餘價值として體現さるべき部分のものも亦、放下されたる總體の資本の價值に對しては、次第に減少するの關係に立つべき筈である。而かも剩餘價值の分量が放下されたる總體の資本の價值に對して有する關係は、即ち利潤率に外ならざるものにて、從てそは次第に下落すべき筈のものである。<sup>(1)</sup>』

「……總資本の膨脹の率が、即ち利潤の率が、資本家的生産の刺戟たる限り、(資本の膨脹は資本家的生産の唯一の目的なるが故に)、利潤率の下落は新たに獨立すべき資本の成立を妨げ、かくて資本家的生産行程の發展を脅す

の觀を呈するに至る。そは生産超過や、恐慌や、投機や、乃至過剰の資本、並びに過剰の人口を、促進するものである。然るに、例へばリカアードの如く、資本家的生産方法を以て絶對的のものなりと考へつゝ、ある經濟學者は、此點に關し、此生産方法それ自體が一の制限を作り出すものなるの理を悟らず、從て此制限をば生産(生産方法)に歸せずして、却て(かの地代説に於ける如く)之を自然に歸せんとして居る。乍併、利潤率の下落に對し彼等の有すべき恐怖の最も主なるものは、實は次の點になければならぬ。即ち利潤率の下落すると云ふことは、資本家的生産方法は生産力の發展に際して、富を富として生産することは何等の關係なき、或種の制限に逢着するものであり、而かもこの特種の制限が行はれて來ると云ふことは、資本家生産方法が決して普遍性を有することなく、只歴史的、過渡的の性質を有するに過ぎざるものであると云ふこと、從つて又そは、決して富の生

(1) Das Kapital, Bd. III, Teil I, S. 191-193. (英譯、第三卷、p. 247 以下)

産に對し絶對的の生産方法たるものに非ずして、寧ろ一定の程度に達したる後は、富の發展と衝突するに至るものである、と云ふことを證明する點である。<sup>(2)</sup>」

「利潤率は資本家的生産に於ける原動力にして、資本家的生産の下に於ては、利潤を擧げ得る物のみが、利潤を擧げ得る限りに於て、生産せらるゝに止まるのである。さればこそ從來英國の經濟學者は、利潤率の下落に對して常に憂慮を有つた。其事が可能なるべしと云ふことだけにて、リカードが早くも心痛せしことは、彼が資本家的生産の條件に就て、正に深き理解を有せし證據である。……社會的勞働の生産力の發展は、資本の歴史的使命であり、特權であつた。恰も之によりて、そは無意識的に、より高度なる生産形態の爲に、其物質的條件を準備した。リカードの心痛せし所は、利潤率が、資本家的生産の刺戟が、資本集積の條件たり動力たる所

(2) 同上、S. 223, (英譯、第三卷、p. 233.)

のものが、生産の發展そのものによつて脅かさるゝことであつた。而かも問題は凡て數量的に明白である。リカードの豫想せるに止まりしものは、實際に於ては、更に深き根據を有する。此點に關しては、純然たる經濟的の考方からして、即ち資本家的思惟の範圍内に於ける有産者の見地からして、資本家的生産そのもの見地からして、資本家的生産は、物質的生産條件の一定限度の發展時期に適應する所の、一の歴史的の、生産方法に過ぎざるものにて、決して絶對的のものに非ずと云ふ點に於て、その限界性、その相對性が證明せらるゝのである。<sup>(3)</sup>」

以上述ぶるが如く、剩餘價值成立の困難は、資本主義的經濟組織の内に包含せられ居る矛盾の第一である。資本家は剩餘價值を取得することを目的として事業を經營して居るのであるのに、——資本家が剩餘價值を取得し得ることが

(3) 同上 S. 241-242, (英譯、第三卷、pp. 304, 305.)

事業の動力と爲つて居るのであるのに、——其剩餘價値の成立が次第に困難となると云ふのであるから、其は一の矛盾と謂はざるを得ない。次に矛盾の第二と爲すべきものは、剩餘價値實現の困難である。蓋し資本主義的經濟組織の下に於て、資本家が種々の貨物を生産しつゝ、あるは、之を他人に賣りて儲けんが爲である。然るに此等の貨物を購買すべき社會の大多數の者は即ち無産者であるが、此等の人々の所得は、從て其購買力は、資本家の資本が増加すると同じ比例を以て増加するものではない。何故といふに、既に述べし如く、資本の増加は主として機械其他の不變資本の方面に行はれ、労働者を使用する爲に用ひらるゝ可變資本の増加の速度は、遙に資本全體の増加速度に及ばざるが爲である。そこで資本家は益、多くの貨物を作り出すにしても、其を他人に賣り付けて、商品の内に包含せられて居る所の剩餘價値を實現することが、次第に困難になるのである。如何に多くの貨物を生産しても、其等の貨物を相當の價格に

於て購入するだけの資力が、一般民衆に無いと云ふ事に爲る。欲しいと思ふ人は澤山居ても、相當の代價を出して買ふだけの資力ある人が無いと云ふことに爲る。そこで折角物を作り出しても、其が十分に賣れないと云ふ現象、即ち今日の經濟社會に特有なる所謂生産超過の現象が起る。この生産超過なるものは、今日の經濟組織の下に於ける一種特別の現象である。それは、物が餘計に生産され過ぎたと云ふことであるが、餘計に生産され過ぎたと云つても、何も總ての人々が一切の物に就て飽滿して居る、と云ふ意味では無い。食べ切れぬだけの食物が生産され、着盡せぬだけの衣服が供給されて居る、と云ふ意味ではない。資本家が或程度以上の儲を得て、其等の品物を相當の値段で捌き盡す爲には、餘りに多くの貨物が生産された、と云ふだけの意味に過ぎぬのである。此の如くにして、所謂生産超過の現象が起る。然るに品物が賣れなければ儲らぬし、又儲らなければ、金儲といふことを以て其原動力として居る今日の經濟組

織は、十分に其力を發揮し得ぬことになり、かくて社會の各方面に互つて、生産力の發展が故意に抑制せらるゝこととなる。即ち企業界全般を通じて生産制限と云ふことが行はれて來るのである。最も分り易い一例を擧ぐれば、ダイヤモンドの主要産地は南亞にあるが、其處の礦山はド・ビヤス會社が凡て獨占して居て、世界産額の殆ど九割を供給して居るのである。ところがダイヤモンドは餘計賣出すと云ふと、必ず其値段が下る。言ひ換ふれば、其値段を廉くしなれば餘計は賣れない。然るに廉くして餘計賣るよりも、高くして少し賣つた方が儲が多いのであるから、同地方に於てはダイヤモンドの礦脈は極めて豊富であるにも拘らず、世界市場の景況を見計つては、少しづつ之を掘出して、皆に高い値段で賣つて居る。即ち自分の儲を多くせんが爲に、態と生産を制限し、生産力を抑制して居るのである。之は分り易い爲に最も極端な例を採つたのであるが、實は今日の經濟組織の下に於ては、總ての生産事業が皆それと同じ原

則の下に、生産の制限を受けて居るのである。例へば紡績會社では能く繰業短縮と云ふ事をやるが、これなども分り易い一例である。何も紡績類が世の中に在り餘つて居る譯ではないのであるけれども、或程度以上に餘計絲を賣らうとすれば、どうしても値段を下げなければならぬ、併し値段を下げて賣つては儲が減るから、わざと餘計造らぬ爲に、所謂繰業短縮を行つて、澤山の機械が据付けてあつても暫く之が運轉を中止して仕舞ふのである。是等は現に吾々が眼で見ることの出来る、最も分り易い、生産制限の例であるが、本當は、現に据付けてある機械より、より以上の機械を据付けるだけの資力が、社會に存在して居るのであるけれども、生産制限の結果、僅かな機械しか据付けられて居ないのである。今私は、其等の點に就て委しく説明する暇を有たぬけれども、要するに産業界の全般を通じて、一種の生産制限が行はれて居る。社會各方面に互つて、生産力の發展が故意に抑制せらるゝこととなつて居る。即ち此點より

見るも、今日の社會組織と生産力とは、次第に矛盾衝突を起し、生産力の發展が社會組織そのものの必然的作用の爲に妨害され束縛さるゝことに爲りつゝあるのである。マルクスは此の如くに觀たのである。

私は先例に従つて、以上述べた所に關係のある、マルクスの原文の數節を、次に引用するであらう。彼は剰餘價値の生産と其實現との間に於ける矛盾に就き、資本論第三卷第一分冊の第三篇第十三章に於て、次の如く述べて居る。(1)

「必要とせらるゝ生産手段の、即ち資本の、十分なる集積を前提とする限り、剰餘價値の創造には、若し剰餘價値の率——即ち労働に對する掠奪の度合——が一定し居るならば、労働者の人口數以外に何等の制限あること無く、又若し労働者の人口數が一定し居るならば、労働に對する掠奪の度合以外に何等の制限は無い。而して資本家的の生産過程は、生産されたる商品の中無償にて使用されたる労働を物體化せる部分——即ち剰餘生産物——に

(1) Das Kapital, Bd. III, Teil I, S. 225, 226.

依りて表現せられ居る所の、かの剰餘價値の生産を以て、其本質とするものである。吾人の忘るべからざることは、此剰餘價値の生産が——而して此剰餘價値の一部を更に資本と爲して、資本の集積を續けて行くと云ふことは、剰餘價値生産の重要部を成す——資本家的生産の直接の目的にして、且其決定的動機たることである。されば吾人は、資本家的生産を解して、享樂を以て其直接の目的と爲し、又は資本家に向つて享樂手段を生産するを以て其直接の目的と爲すものと爲しては勿らぬ。吾人にして若し此の如き誤解を爲さんか、吾人は、資本家的生産の特徴にして之が中核を爲す所のものを、全く看過するに至るであらう。

「此剰餘價値の獲得は即ち直接の生産過程を成す所のものにて、之に對しては、上に述ぶるが如きものの外、何等制限と爲るべきものは無い。而して搾り取られたる一定分量の剰餘價値が商品に物體化されて仕舞つたならば、

其時に剰餘價値の生産は既に完了するのである。乍併、此の如き剰餘價値の生産は、單に資本家的生産過程の第一段たるに過ぎざるものにて、即ち直接の生産過程だけが其にて終了するのである。資本は之に依つて若干の無償労働を吸収して仕舞ふ。……かくて其次に來るものは、第二段の過程である。商品全體、生産物全體は、不變資本及び可變資本を代表する部分も、剰餘價値を代表する部分も、總べて賣却されなければ勿らぬ。若し之を賣却すること能はざるか、又は單に其一部を賣却し得るに止まるか、乃至生産費以下の價格にて賣却し得るに過ぎざる時は、労働者は現に掠奪されたるに係らず、其の掠奪されたるものは其のまゝ資本家の爲に實現せらるゝに至らず、即ち搾り取られたる剰餘價値は全部實現せられざるか、又は單に一部分實現せらるゝに止まり、爲に資本の全部又は一部の損失を伴ふことに爲る。直接の掠奪の條件と、之が實現の條件とは、決して同じものでは無

い。二者は常に時及び所の關係に於て同じからざるのみならず、概念的にも同じくない。前者は只社會の生産力に依りて制限せらるゝのみなれども、後者は各種の生産事業の比例的關係及び社會の消費力に依りて制限せられる。然るに此の社會の消費力なるものは、絶對的の生産力又は絶對的の消費力に依りて左右さるゝものに非ずして、只敵對的の分配關係——それは社會大多數の者の消費をば、最小限度に制限し、之をして纔に狭き範圍内に於てのみ増減するに過ぎざらしむる所のもの——を基礎とせる消費力に依りて左右せらるゝものである。消費力は更に、資本集積の傾向、即ち資本を擴張して益、大規模に剰餘價値を生産せんとする衝動の爲にも、制限せらるゝものである。こは蓋し、生産方法そのものの上に絶えざる革命行はれ、其結果として現存資本の減價を生ずること、又一般に激しき競争行はれ、滅亡の運命を免れ自己保存を爲すが爲には、常に生産物を改良し且生

産の規模を擴張する必要あること、等より生ずる所の、資本家的生産の  
 一法則である。……乍併、(資本集積の結果)生産力の益、發達するに伴う  
 て、それは消費關係の依存せる狹隘なる基礎と、益、矛盾することに爲る。  
 今此の如き矛盾せる基礎に立つ以上、一方には資本の過剰あると同時に、  
 他方には人口の過剰益、甚しきを加ふるに至ると云ふことは、毫も怪むに  
 足らざることである。勿論過剰の資本と過剰の人口とは相待つて、生産さ  
 るべき剰餘價値の分量を益々増加するに至るであらう、乍併之と同時に、  
 此等の剰餘價値を生産する所の條件と、それが實現せらるゝに至る所の條件  
 との間に於ける矛盾衝突は、益、其の甚しきを加ふるに至るべきである。<sup>(2)</sup>  
 又同上第十五章の一節には次の如き文句がある。

「資本家的生産に對する眞の障壁は、資本それ自身である。即ち資本及び資  
 本の膨脹が、生産の出發點であり又終點であり、其動機であり其目的であ

(2) 同上、S. 231-232.

ると云ふこと、——生産は只資本の爲の生産にして、其と逆に、生産手段  
 が、生産者の組織せる社會全體の利益の爲め益、擴大せらるゝ所の生産過程  
 に應ずべき、單なる手段となり居らずと云ふこと、——之が眞の障壁であ  
 る。されば此等の障壁は、——只其内に於てのみ、資本の維持及び膨脹は、  
 生産者の大多數の掠奪及び貧民化を土臺として、行はるゝのであるが、——  
 資本を以て其目的となす所の、又生産の無限なる膨脹、自己目的としての  
 生産、及び労働の社會的生産力の無條件的發展に向つて、驀進すべき所の  
 生産方法と、絶えず撞著することと爲る。其手段——即ち社會的生産力の  
 無條件的發展——は、その限定されたる目的——即ち現存せる資本の膨脹  
 ——と、益、衝突することに爲る。されば資本家的生産方法は、物質的生産  
 力を發展せしむる爲め、又之に適應する所の世界市場を作り出す爲め、一  
 個の歴史的手段たるを失はざるものなれども、それは又同時に、其歴史的使

命と之に適應する所の社會の生産關係との間に於ける、絶えざる撞著の因となるものである。」

以上述ぶるが如く、資本主義の經濟組織の下に、社會の生産力が或程度まで發展して來ると、それより以上は、生産力の發展が却て社會組織の爲に束縛せらるゝことに爲る。されば若し唯物史觀の教ふる所にして正しとすれば、今日の資本主義的經濟組織は、遠からず崩壊すべき必然的運命の下に在る、と言はなければならぬ。なほ唯物史觀の教ふる所に依れば「新たななる、より高度の生産關係(即ち社會組織)は、そのものの物質的存在條件が古き社會の母胎内に於て孕まれる、以前に於て、決して發生し來るものでは無い」。然らば今日の資本主義的組織の内に、將來生まるべき、新たななる、より高度の社會組織——マルクスの見る所に依れば、それは即ち社會主義的組織である——の物質的存在條件が、已に孕まれつゝあるや否や、と云ふに、マルクスに従へば、資本主義的

組織の下に於て當然行はるべき資本の集合及び集中 (concentration and centralisation) の現象は、取りも直さず、將來生まるべき新社會の物質的存在條件に外ならぬのである。茲に資本の concentration (集合) と云ふのは、資本が大規模の事業に集合されることである。例へば絲を紡ぐと云ふ仕事の如きも、以前は全國に散在して家々で小規模にやつて居たものであるが、今日は若干の大工場に集合されて、其處に大なる資本が集積せられて居る。それが即ち資本の集合である。次に資本の centralisation (集中) と云ふのは、多數の人々が有つて居た所の資本が、一部小數の大資本家の手に集中されて仕舞ふことである。例へば之を土地に就て言へば、澤山の地主に分割されて居た土地が、次第に大地主の爲に兼併されて仕舞ふと云ふの類である。何故此の如き資本の集合及び集中と云ふことが、資本主義的經濟組織の下に於て、必然的に起つて來るか、其理由は茲に述べて居る暇がないが、兎に角さう云ふことが起つて來る。ところ



が資本が大規模の事業に集合せられ、又少数者の手に集中せらるれば、せらるゝほど、其資本を社會の公有に移すことは極めて容易になる。社會の資本が全國に互り少しづつ、方々に散つて居たり、又資本が澤山の人々の手に分配されて存在して居る時は、それを社會の公有に移して仕舞ふと云ふことが甚だ困難であるが、併し資本主義が發達して來ると、必然的に少數の資本家が人々の有つて居る資本を皆自分の所に集めて仕舞ひ、又諸方で行はれて居た小規模の事業も一つ所に集められて大規模の事業になつて來るのであるから、之を社會の公有に移すと云ふことは段々簡單になる。少數の大富豪が天下の資本を集中して非常なる大規模の事業を經營して居る、其所有權を取上げて國家の手に移すと云ふだけの事である。大規模經營の下に生産せらるゝ所の剩餘價值が、寢て居る所の若干少數の大富豪の所有に歸するか、社會全體の共有に歸するか、と云ふことだけの問題である。問題が大變樂になる。斯の如き意味に於て、資本の集合及び集

中は、將來生るべき社會主義的組織の物質的の在存條件を準備しつゝある、とマルクスは考へたのである。併ながら既に繰返し申す如く、總て社會なるものは、多數の人々が相集合して組織せるものである。隨て其組織の改造には、必ず一定の主動者あることを必要とする。即ち舊組織の崩壊、新組織の實現の爲には、常に物質的條件の備はり居ることが必要であるのみならず、それと同時に人間の方面に於ける條件が、人的條件が、具備せられてあることが必要である。然らば其人的條件はどうであるかと云ふに、マルクスの考ふる所に依れば、資本主義的組織の下に於て次第に其數を増加し又其勢力を増進しつゝある所の労働者階級こそ、即ち此社會改造の主動者たり擔當者たるべき者である、と云ふのである。然らば其労働者の數は如何なる理由に依つて必然的に増加し、又労働者の勢力は如何なる理由に依つて必然的に増進するか、時間がないので其理由を述べる暇はないが、極く分り易い簡單な例を取つて、如何に労働者の勢力

は、資本主義の下に於て、次第に増進し來らざるを得ざるかの、大體の様子を一言して置かうと思ふ。

労働者の勢力は、資本主義の經濟組織が進歩するに隨つて、必然的に段々強くなつて來るものである。何故といふに、昔は方々にばらばらに散つて居つた所の労働者が、今日は數千人數萬人といふ數に固まつて、大きな工場の中に集中されて居る。労働者間の感情及び思想の交通が、必然的に極めて容易にされる。労働者の團結が之に依つて促進される。機械が段々發明されるに従つて、どうしても労働者の教育を進めなければ役に立たなくなる。而かも労働者を教育すれば、彼等の自覺と云ふものが必然に起つて來る。此の如く色々なことで、労働者の勢力は次第々々に進んで來るけれども、併し假に、それ等機械の發明や、大工業の勃興や、其他の技術上の變化を一切抜にして、極く簡單なる一例に就て考へて見ると、大變汚ない實例を引くので失禮を許して頂かなければな

らぬが、我々の大小便を取る所の肥し屋の労働と云ふものは、數十年數百年前の労働と、其外形に於て其形式に於て其技術に於て、殆ど何等の變化もして居ないので、即ち資本主義の影響を最も受けて居らぬ、昔ながらの労働である。此の如く資本主義の支配を免れて居る、昔と殆ど變化の無い、労働に就て考へて見ても、之に従事する労働者の勢力は、今日では非常に増大して居る。私は敢てストライキを煽動する譯ではないが、分り易い爲に、一例を引くのであるが、過日東京の新聞社の職工がストライキをした時に、東京の新聞紙は三四日間其發刊を中止するの已むを得ざるに至つた。當時是が爲め随分不便を感じた人もあらうと思ふが、併し三四日間新聞を見ない位の不便は知れたものである。若し東京市に關係のある肥し屋が一週間程全部ストライキをしたならば、東京市民はどれだけの困難を感じるであらうか、殆ど想像に餘りあることである。肥し汲みと云ふ仕事は、從來極めて輕蔑されて居た労働である。さうして彼等は、

人の排泄物を汲取る爲に、自分の方から一定の代價をさへ支拂つたものである。併し彼等が若し一たびストライキの擧に出たならば、吾々は彼等に厚く禮をして、嘆願して持つて行つて貰はなければならぬ、と云ふことになるであらう。其を思へば、形勢は何時の間にか變化して居るのである。是はどう云ふ譯であるかと云へば、資本主義が發達した爲に、吾々は必然的に都會の地に生活をすゝるようになつて來た、その爲に吾々の排泄物を仕末すると云ふやうな労働が、それに伴うて何時しか非常なる權威を有つことになつたのである。田舎に生活して、居宅の周圍に多少の菜園を有つて居る場合ならば、肥し屋は來なくとも、嫌な労働をさへ少し辛抱すれば、大根畑に掛けてでも之を始末するに差支ない。けれども斯う云ふ風に（講堂の周圍を指す）吾々が多勢集まつて都會生活をし、て來ると云ふと、同じ肥し汲みと云ふ労働が、吾々の共同生活の上に、既に非常なる權威を有つて來ると云ふことになる。従て労働者の勢力は増進せざるを

得ぬのである。此の如くにして、彼等労働者は、次第に社會の死命を制するの實力を具へて來る。故に彼等の利益と一致する所の社會組織の改造は、彼等に於て自覺し來る限り、必ずや主として彼等の手に依りて行はるゝことに爲る。其意味に於て、労働者階級が資本主義組織の下に於て、次第に其數を増加し其勢力を増進することは、社會主義組織の爲めの人的條件の準備と看做すことが出来る。マルクスは此の如くに考へたのである。

私は今マルクスの經濟論中、理論に關する部分の説明を終るに當り、前々からの例に倣つて、資本論の中より、以上述べたる所と密接なる關係を有する「資本家的集積の史的傾向」と題する一節（第一卷、第七篇、第二十四章、第七節）<sup>(2)</sup>の全文を譯出して、マルクスの論法の一斑を髣髴せしむるの一材料と爲して置かうと思ふ。

「資本の最初の集積即ち資本の歴史的起源は、如何にして生ぜし乎。そは奴

(2) 第四版、S 728-729.

隷及び農奴をば、只其形式を變じて、直ちに賃傭労働者と爲したる場合に非ざる限り、それは直接生産者の掠奪に依り、即ち自己の労働の上に立てる私有財産の廢止に依りて、起りしものである。

『社會的、團體的財産に對立する所の私有財産なるものは、労働手段及び労働の外部の條件が私人に屬する場合にのみ成立する。乍併、此私人が労働者なるや又は非労働者なるやに依つて、私有財産の性質は常に相違するものである。而して一見する時は、無限の相違あるが如くなれども、それは皆、此兩極端の間に横はれる状態たるに過ぎぬものである。

『労働者が其生産手段を自己の私有財産として所有し居ることは、小企業の基礎である。而して此小企業なるものは、社會的生産の發展の爲め及び労働者自身の自由なる個性の發展の爲め、缺くべからざる條件である。勿論此の如き生産方法は、奴隸制度、農奴制度、及び其他の從屬關係の中に於

ても、存在したりしものである。乍併、それが繁榮し、其全力を發揮し、相當なる典型的の形態を採るに至りたるは、労働者が彼自ら使用する所の労働條件をば其自由なる私有財産と爲せし場合にして、即ち農民は其の耕作せる土地を所有し、職人は其の使用に係る道具を所有し居りし場合である。『此生産方法は、土地及び其他の生産手段の分散を前提とする。それは此等生産手段の集中を否定すると同時に、又協力、各生産經過の内部に於ける分業、自然に對する社會的の征服及び支配、社會の生産力の自由の發展を不能ならしむるものである。それは狹隘なる自然的制限を有する生産及び社會とのみ、只兩立し得るに止まる。之を永久に維持せんことは、正に *Pequeurs* の言へるが如く、「一般的平凡を命令する」が如きものである。然るに此制度は、或程度まで發達すると、其れ自身を崩壊せしむべき物質的手段を作り出すに至るものである。かくて社會の母胎には新たなる力と感情が發動し

而かもそは舊制度の爲に拘束を感ぜざるを得ざることと爲る。事茲に至らば、舊制度は崩壊されなければならぬし、又崩壊されて仕舞ふ。即ち其崩壊に因つて、個人的に分散して居た生産手段は社會的に集中され、從て多數人の微小の財産は少數者の巨大の財産に變じ、從て又多數の人々は土地及び生活手段及び労働具を掠奪されて仕舞ふことに爲るが、此の多數者に對して行はるゝ恐るべき且痛むべき掠奪は、實に資本の前史をなすものである。吾人は資本の原始的集積の方法に就て只その時代を劃するもののみを觀察したるに止まれども、そは實に幾多の悲惨なる方法に依つて行はれたものである。直接生産者に對する掠奪は、最も無慈悲なる兇暴を以て、最も賤むべき、最も汚れたる、最も狹量なる、最も憎むべき感情の下に、實行された。かくて、自己の労働に依つて得たる私有財産にして、言はば各自獨立して労働に従事せる個人と其者の労働條件との融合に立脚せし私有財

産は、資本家的の私有財産、即ち只形式上に於て自由なる他人の労働を掠奪することに依り成立せる私有財産の爲め、推し除けらるゝに至りしものである。

『此の如き變革の經過が、深さに於て又廣さに於て、舊社會を十分に崩壊し了る時は、労働者は變じて無産者となり、彼等の労働條件は變じて資本となり、資本家的生産方法は全く自己の立脚地の上に立つことに爲るが、更に其に引續いて労働が社會化され、土地並びに其他の生産手段が益、社會的に掠奪されて共同的の生産手段に變じて來ると、之に續いて行はるべき私有財産の所有者に對する掠奪は、遂に一の新なる形式を採ることに爲る。即ち掠奪せらるゝ所のものは、最早獨立經濟を營みつゝある労働者には非ずして、今や多數の労働者を掠奪し了へし資本家が、却て掠奪せらるゝことに爲るのである。』

『斯かる掠奪は、資本の集中てふ資本的生産に内在せる法則の作用に依つて實現せらるゝ。一個の資本家は、常に多數の資本家を打ち殺しつゝあり。而して、多數の資本家が此の如く僅かなる資本家に依りて掠奪せらるゝことに依り、資本の集中は次第に行はるゝと共に、他方に於ては、労働方法に關する協力の形式、技術上に於ける科學の意識的應用、土地に關する計畫的利用、労働手段をば凡て共同的にのみ使用し得べき種類の労働手段に變更すること、凡ての生産手段をば結合的、社會的労働の生産手段として之を經濟的に使用すること、凡ての國民が世界市場の網に巻き込まるゝこと、又之に伴うて、資本家的支配が國際的性質を有するに至ること、凡そ此等の現象が亦、同時に益、廣き範圍に互つて發展するに至るものである。今斯かる變動の經過に伴ふ凡ての利益を、横領し獨占する資本長者の數は、絶えず減少すると共に、貧窮、壓制、隸屬、墮落、掠奪の境遇に陥る者の數

は益、増加し、而かも又、絶えず膨大する所の、且資本家的生産經過の裝置に依り訓練され、結合され、組織化せらるゝ所の、労働者階級の反抗も亦益、増加する。資本家的生産方法は嘗て資本の獨占と共に、又其下に於て、繁榮し來れるものなるが、今やそは却て其生産方法に對する一の拘束物と爲るに至るものである。此の如くにして、生産手段の集中と労働の社會化とは、遂に資本家的の外被と兩立し得べからざる點に達する。かくて外被は爆裂して仕舞ふ。資本家的の私有財産の吊鐘が鳴る。掠奪者が掠奪さるゝことに爲る。

『資本家的生産方法より生ぜし資本家的の占有方法、即ち資本家的の私有財産は、己れ自身の労働に立脚せる個人的の私有財産の第一段の否定である。乍併資本家的生産は、自然的經過の必然性を以て、己れ自身の否定を惹き起す。そは否定の否定である。其結果は、私有財産を再び恢復するものに

非ずして、資本家的時代に行はれたる成果、——即ち協力、土地の共同所有、並びに労働に依りて生産されし生産手段の共同所有、——を基礎とせる所の個人的の所有である。

『個人自らの労働の上に立脚せし分散的の私有財産をば、資本家的の私有財産に変更することは、事實上已に社會的なる生産經營の上に立脚せる資本家的の私有財産をば、社會的のものに変更する場合に比すれば、勿論比較すべからざる程度に、より多くの時間を要し、より難澁にして又痛ましき經過であつた。前の場合には、少數の篡奪者に依りて國民の大多數が掠奪せられたのであるが、後の場合は、國民の大多數に依りて少數の篡奪者を掠奪するのである。』

#### 第四段 社會民主主義

私はスミスの思想を説明する際にも、又マルサスの思想を説明する際にも、理論の部と政策の部とを分け、さうして理論の部に於て説明したる彼等の思想の當然の歸結として、政策の方面に於ては自由放任主義の主張を生ずるに至りしことを述べた。今之と同じ説明法をマルクスの上に適用するならば、以上第二段及び第三段に於て述べ來りたる理論の當然の歸結として、政策の方面に於ては、以下述べんとするが如き社會民主主義の主張を生ずるのである。尤も私は、マルクスの主張したる政策をば、茲に委しく説明する時間を有たぬし、又其自由を有たぬかも知れない。併し政策は凡て之に先てる理論から生じて來るのであるから、既にマルクスの理論を述べ終へた以上、其政策に就ては、特に之を詳しく述べる必要もない譯である。仍て唯主なる二三の點を列舉して、此講演を終りたいと思ふ。

第一に、マルクスの理論と政策との關係に就て、一言して置かなければならぬ事がある。蓋しマルクスの理論は、既に述べたる所によりて明かなる如く、一種の必然論から成り立つて居る。今日の資本主義的組織は必然的に崩壊して、社會主義的組織は早晚之に代りて出現すべきである、と云ふのである。ところがマルクスを誤解する人々は、此の如き必然論からは何等の政策論も出て來る筈がない、と云ふのである。社會主義的組織の實現と資本主義的組織の崩壊とが果して必然の運命であるならば、マルクス主義者は何故に其主義の宣傳運動の爲に骨を折つて騒いで居るのか、手を拱いて眠つて居れば宜いではないか、と云ふのである。併ながら吾々は此點に就て次の數項を考へて見なければならぬと思ふ。(一)既に述べた如く、アダム・スミスの自由放任主義も亦、能く考へて見ると、一種の必然論に基いたものである。人と云ふものは本來利己的なも

のである。その利己的な人間を、資本主義の經濟組織の下に放任して置いたならば、必然的に社會全體の利益を増進することになる、といふ一種の必然論に基いて、彼の自由放任主義が樹立されて居るのである。斯かる必然論を信ぜしが故に、彼は初めて一切の保護干渉に對し熱心なる反對を爲し得たのである。今マルクスの議論の遣方も之と殆ど同じである。社會の生産力と社會組織とが矛盾するに至る時は、その社會組織は——社會にして正常なる進化の過程を辿る限り——必ず崩壊し終るべきである。もし斯かる場合に社會組織の改造が實現せられぬならば、何時までも社會の生産力の發展が抑へらるゝことになるから、其社會は必然的に退化衰亡の運命に陥るべきである。マルクスはかう考へたからして、其必然論に基いて、——即ち社會をして沈滯萎微せしめざらんとすれば、一定の時期に臨んで其組織を改造するに外なし、との信念に基いて、——社會組織の改造、即ち社會主義的組織の實現を主張するに至つたのである。



マルクス主義者の間に熱烈なる社會改造運動の起らざるを得ざる所以である。  
 (二)吾々は又此點に就き、次の問題をも考ふる必要がある。即ち吾々は、實際の政策を樹つる場合に、其政策たる、果して實現の可能性を有するものなるや否や、と云ふことを吟味して見なければならぬのである。世の中は斯うならなければならぬ、斯うしなければならぬ、と云ふことだけを考へたのではないかぬ。それが果して實行が出来るかどうか、之が實現は可能であるかどうか、と云ふことを併せ考へなければ、政策論は空想論に終つて仕舞ふ。今マルクスの議論は、資本主義の崩壊並びに社會主義の實現が可能なりと云ふことを明瞭にし、彼以前に出でたる幾多の空想的社會主義者の理想郷に對して、實現の希望性を賦與せしものである。それでマルクスの社會主義は、それ以前の思想に對し、次の如き關係に立つて居る。即ち一方に於ては、サン・シモン、ブルードン、ルイ・ブラン等の所謂空想的社會主義から、社會主義の理想を承け繼いで居る、

併ながら其理想の實現が可能であると云ふことを立證する爲に、そこへ一定の科學的理論を備へ付くるに際しては、前に述べたやうに、スミス、マルサス、リカード等によりて次第に建設されたる個人主義經濟學の理論を借りて來つて、それを少しく發展させただけのことである。既に申せし如く、一のサイエンス(科學)を打立てる爲には、人間は斯うしなければならぬと云ふことを、出發點にしただけでは足りない。それでは、そこに一の道德論、一の説教が成り立つだけである。之と異り、人間の性質は斯の如きものであると云ふことを前提として、そこから出發すると云ふと、初めて一のサイエンスが成り立つ。之をアダム・スミスに就て言へば、人間は利己的なものであると云ふ觀察——其事の善い惡いは別にして、兎に角人間は利己的のものであると云ふ觀察——さう云ふ事實の認識から出發して、彼は初めて一の科學としての經濟學を建設したのである。又マルサスは、色食は人の性なり、といふ所から出發して居る。即ち彼

の議論も亦、人間性に關する一の事實的認識を基礎とする譯である。然らばマルクスは何處から出發したかと云ふと、凡て向上的の人間は生産力の發展に對する人爲的束縛に必ず反抗せんとする氣質を有つて居るものである、かう云ふことを前提として出發して居ると私は思ふ。マルクスの意見によれば、一定の社會組織の下に於て、社會の生産力が次第に發達して來ると、やがて其社會組織の第二期にはいることになるが、さうなると生産力の發展は社會の仕組の爲め人爲的に束縛されて來て、其結果、人々が社會の退化衰亡に甘んぜざる限り、必然に其社會組織は破られることになる、とかう云ふのであるが、此主張の基礎には、人間性に關する一種の觀察、即ち凡そ向上的の人間は生産力の人爲的制限をば如何にしても打破して進むと云ふ性質を有つて居るものであると云ふ觀察が横つて居ると思ふ。委しく言へば、吾々が物を造出す力——即ち社會の生産力——が極めて幼稚である爲に、お互ひが皆貧乏して居ると云ふのなら

ば、社會に不平の起るべき筈がない、皆が現状に甘じて居るより致方がないのである。併し假に今日の狀態に就て之を言へば、十八世紀末以來發明されたる諸の機械は各方面に次第に普及されて來て、吾々人間の生産力は今日非常に進歩して來て居るのである。只其生産力の働きが、今日は既に社會組織の爲に束縛せらるゝ時期に進んで居るので、十分に其力を發揮することが出來ないで居る。それ故多數の人々は皆貧乏して困つて居るのである。併し若しも社會組織を改造して仕舞つたならば、生産力の束縛が解けて仕舞ふから、社會の生産力は非常なる發展をなし、種々の貨物が十分に行はれ得る筈である。今吾々が斯かる状態の下に在ることを意識して來たならば、吾々は——退化衰亡に甘んずる人種でない以上——如何にしても現在の社會組織を改造しなければならぬと云ふことを、多數の者が考へて來る筈である。それは動かすべからざる人間性である、とマルクスは觀て居る。さう云ふ所から彼の必然論が出て來る。さ

うして其必然論から見れば、資本主義的組織の崩壊、並びに社會主義的組織の實現は——社會にして向上進歩せんとする限り——到底免る可らざる運命である。故に吾々は、この自然的必然の勢を認め、資本家も政治家も労働者も此大勢に應じて大勢を制して行きたいものである、と云ふ所から、マルクスの政策が生れて來るのである。それが彼の必然論と政策論の關係である。

第二に、社會民主主義とは何ぞや、と云ふことに就て、一言して置きたい。

私は既に第一講の第三段の所で、近世民主主義の發達をば二期に分ち、第一期の民主主義は、事實に於ては第三階級の、資本家階級の、民主主義であるが、それを更に徹底せしむる時は、社會全員の平等を要求する所の民主主義となると言つた。その民主主義が即ち茲に謂ふ社會民主主義である。マルクスの社會主義の主張する所は、資本の公有であつて、言ひ換ふれば、資本といふ一種の財

産に就て共產主義を實行しやうと云ふのである。總じて共產主義又は社會主義と云へば、最も恐るべきもののやうに世間から思はれて居るが、私の觀る所では必しもさうでない。既に前回にも申せし如く、道路の如きは今日既に共產主義に依つて經營されて居る。天下の道路は天下の人の共有である。其道路の上を朝から晩まで、年から年中、歩いて居たいと思ふ人があるならば、それは人の自由であつて、いくら利用したとて差支ない。又退いて吾々一家族内の生活状態を考へて見ると、吾々は其處でも亦共產主義を實行して居るのである。例へば私が學校から一定の月給を貰ふ、さうして之を妻に渡す、妻は家族一同の必要に應じて、與へられたる若干の金をそれらの費用に分配して、一家の生活を經營して行くのである。私の長男は近頃大病に罹つて既に百日餘り床に就いて居るが、彼は吾々家族の爲め何等の勞働も提供しては居ないけれども、それにも拘らず、彼の健康が之を必要とするが故に、家族内では最も良い食物

を彼に與へて居る、私は私自身に對するよりも餘計な費用を彼の爲に費して居る。又私は九十餘りになる老祖母を有つて居るが、彼は既に老人であるから、固より何等の勞働に服して居らぬけれども、吾々は其必要に應じて一定の衣服と食物を與へ、成るべく不自由をさせぬやうにして居る。是が即ち共產主義である。此家族的<sup>この</sup>生活の精神を全社會に及ぼさんとするのが、本來共產主義、社會主義の根本精神とする所である。其精神を資本といふ一種の財産に限定して適用すると、そこに資本公有主義が生れるのである。然らば資本とは何ぞやと云ふに、之は大變に面倒な問題であるが、簡単に粗雑に言へば、勞働者を雇入れ、彼等の剩餘勞働を奪ふ爲に使用されて居る所の財産、それをマルクスは資本と謂うて居るのである。普通の經濟學教科書を御覽になると、資本とは過去の生産物にして將來の生産に役立つものなりと云ふやうな定義が下されて居るが、此定義に従ふと、我々が家の中で御飯を焚く爲に使つて居る所の竈でも鍋

を以て之を  
 資本と云ふ  
 而してこの社會家族  
 の家長 種族の  
 家を 構大なる  
 家長の如く之を  
 家長の家做と  
 云ふべきなり

でも釜でも、皆之は資本であると云ふことになる。着物を縫ふ爲の針も鉄も亦資本であると云ふことになる。併し斯かる道具等が總て國有になる譯のものではない。マルクスが資本と謂ふのは、此の如きものを盡く意味して居るのではない。他から勞働者を雇入れ、其勞働者の剩餘價值を掠奪する爲に役立つ所のものを、名けて資本と謂ひ、之をば社會の公有にせんことを主張して居るのである。故に數名數十名の人が集つて一つの組合を造り、そこで一定の食物なり衣服なりを拵へて、お互ひに分配して之を消費すると云ふことであれば、其處には一定の機械と一定の建物とが私人の所有に屬して居る譯であるが、其等の機械や建物<sup>が</sup>他人の勞働を掠奪する爲の手段として用ひられて居ない以上、他から勞働者を雇入れて其勞働者の上前を刎ねて不勞所得を得て行く爲に用ひられて居ない以上、其等のものはマルクスの謂ふ資本ではないのである。要するに彼の理想とせし社會は、資本家及び勞働者と云ふ階級の區別を無くし、資本

家に依る労働者の掠奪を不能ならしめ、従て所謂不勞所得なるものを無くして仕舞ひ、働かなければ食へないと云ふ主義が、總ての人に適用せらるゝ所の社會である。勿論子供であるとか、病人であるとか、老人であるとか、云ふやうな働くことの出来ない者は例外であるけれども、苟も働くことの出来る者に對しては、働かなければ食へないと云ふ原則を一般的に適用したいと云ふのである。即ち簡単に言へば、擧國労働論と云ふ意味で資本家撲滅論になる。資本家撲滅と云つても、今居る所の資本家の首を刎ねて行かうと云ふのでない。今日の社會組織の下では遊んで食つて居る人々も、我々と一緒に働いて呉れると云ふやうな社會組織を實現したいと、斯う云ふのである。而かもそれは、能く考へて見ると、最初アダム・スミスの唱へ出した自由競争論、獨占反對論を唯徹底せしめただけの主張である。今日の社會には土地又は資本を獨占して居る者があるが、それを止めやうと云ふのである。そうして世の中に生れて來たほどの者は、

独占資本の  
 資本主義の  
 独占資本の  
 独占資本の

社會全員の總てが、自由競争の下に各々の天分を發揮せしめて行くことにしやうと云ふのである。故にスミスの理想とマルクスの理想との間には、實はさしたる差異はないのである。只第一期の民主主義を徹底せしめて、第二期の民主主義としたまでのことである。

以上が社會主義の主張の大體であるが、然らば何故マルクスの社會主義は特に社會民主主義と云ふか、それは次の如き譯である。單に事業を國家の經營に移すと云ふことだけでは駄目である。政治の運用を民主化しなければいかぬと云ふのである。假に分り易い一例を取れば、今日鹽專賣と云ふことが日本で行はれて居る。鹽を賣ると云ふ事業は、私人の營業から取上げられて仕舞つて、今日は國家事業になつて居るので、其點のみ言へば、之は社會主義の一端である。併ながら今日の如き政治組織の下に於ては、其鹽專賣と云ふことが一般民衆の利益になるやうに使用されて居らぬ。御承知の通り、我國の鹽專賣益金は一々

年約九百萬圓であるが、之は實際から言へば鹽に非常な税が掛つて居ると同じことである。然るに此九百萬の租税に相當するだけのものを、千萬長者も日稼人も、皆一樣に負擔して居るのである。否我國に於ける鹽の用途の約七割六分は、漬物、醬油、味噌の製造に充用されつゝあるが、此等の食料品は、富豪よりも却て貧民が多量の使用をして居るのである。殊に彼等は生活の餘裕を有せず、生活費の大部分は之を食費に充てつゝあるに拘らず、梅干を買ふにも、漬物を買ふにも、乃至鹽鮭一片を買ふにも、彼等は常に鹽税を負擔して居るのである。元來租税は負擔能力に應ずべきもので、金持になればなるほど、割合に多くを負擔すべき道理だけれども、我國の鹽專賣の如きは其が逆になつて居るのである。事情は此の如くであるから、それは形に於てこそ社會主義に似て居るけれども、其實は *state-capitalism* 國家資本主義であつて、國家社會主義ではない。多數の人々の利益には少しもならずして、却て多數の人々が搾り取られると云ふ

結果を齎す。それは政治組織が悪いからである。故に社會主義の要求に伴うて、政治を民主化したいと云ふ要求が、當然に起つて來るのである。それがソーシアル・デイモクラシー（社會民主主義）の大體である。

第三に、其社會民主主義を實現する爲に、マルクスは如何なる手段を主張したかと申すと、是は日本に於てのみならず歐米諸國に於ても最も嫌はれて居る所の、階級争闘と云ふ方法である。是は過日來説明したマルクスの理論に基いて必然的に出て來なければならぬ手段である。其理論をば極く簡単に説明すれば、譬へば東海道に鐵道を敷かうと云ふ問題が起つたとする。それは如何にして實現せらるべきかと云ふに、從來東海道の交通を司つて居た雲助共之を御頼みして置いては——鐵道を敷くと云ふことは、社會全體の爲には大變利益であるが、雲助共の爲には不利益であるから、——其成效は百年河清を待つが如き

ものである。それと同じやうに、今日の資本主義的經濟組織を改造して新たな社會主義の組織を實現すると云ふことは、社會全體の爲には利益なることであるけれども、今日の權力者たる資本家階級の爲には差當つて不利益なることである。故に斯かる事業は、權力階級の人々に一任して置いては到底駄目である。今日の社會組織の下に不利益を蒙るの地位にある所の第四階級の者どもが、自覺を起し自ら奮ひ起つて、是が實現の爲に反對の勢力を壓倒して仕舞はなければ、到底駄目であると云ふのである。嘗て御話したやうに、資本家と労働者との利害は調和せぬものであると云ふ事は、既にリカアードの道破した所であるが、只彼は労働者の利益は資本家の利益の爲に犠牲とすべきものであると主張することに依つて、資本主義の辯護者と爲つた。然るに今マルクスは、労働者の資本家に對する反抗を主張することに依つて、社會主義の主唱者と爲つた譯である。

甚だ不完全ながら、是でマルクスの社會主義經濟學の説明を終ることにする。而して最初から御断りを致したやうに、私は以上に於て、只マルクスの思想は斯の如きものであると云ふことを紹介しただけのことと、之に向つて更に批評を加へる爲には、私に最早や其時間もないが、元來其能力も無いのである。併ながらマルクスの社會主義經濟學に就ても、又之と正反對の立場にあるスミス、マルサス、リカアード等個人主義經濟學に就ても、双方とも成るべく公平に、同じ程度の強さを以て、其要點を説いて來た積りであるから、兩者を對照して吟味なされたならば、賢明なる諸君は、二者の中その何れを採るべきであるか、或は双方より其理論の如何なる部分を採るべきであるか、自ら適當なる判断を有たる、ことであらうと思ふ。拙い講演を致したに拘らず、酷暑の折柄、引續き多數の諸君の御來聽を忝けなく致しましたことは、私の有難く思ふ所であります。(以上、大正八年八月十四日、午前七時より同九時四十分まで、講了)

大正九年四月七日印  
大正九年四月十一日發  
大正九年八月一日廿七版發行

近世經濟思想史論

定價壹圓五拾錢

著者 京都市吉田町二本松

發行所 京都市神田區南神保町十六番地

印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二番地



發行所

岩波書店

電話九段 一一二二  
八八〇  
東京二六二四〇

行印社會式株刷印洋東



502  
15

終

